「七拾三」

文政元寅十二月廿八日与左衛門殿御下ケ承付返上

御目付衆

拝領屋敷 大縄之内

諏訪部紋九郎支配

岩瀬伊予守

御口之者組頭

川村喜三郎

巣鴨原町弐丁目

右拝領屋敷者御中間大縄町屋敷ニ付御中間組江返シ被下候間相

渡可申候、請取人・立合之者明廿九日四時晴雨共右場所江御差

出可被成候 十二月廿八日

同廿九日組頭壱人・賄役壱人場所江罷出地面受取せ候ニ付、 翌.日

左之御届壱通御当番江差出ス

坪数七拾五坪

諏訪部紋九郎支配 御口之者組頭 川村喜三郎

候

組与力小原辰次郎両人罷越、 右上り地面昨廿九日永田備後守組与力中山弥十郎・岩瀬伊予守 地面相渡候二付請取候旨組役之者

申聞候、依之申上候、以上

寅十二月晦日

新古改撰誌記

卷之弐

御中間頭 神谷兵太夫

岩瀬伊与守組与力 同年寄同心 小原辰次郎 地所引渡ニ罷出候もの 中山八五郎 永田備後守組与力 同年寄同心 中山弥十郎 滝田宇右衛門

樽屋三右衛門 町年寄手代 今井由次郎 地割手代 秋本安兵衛

神原兵蔵

「七拾四」

是迄之通相心得候様駿河守殿より御下ケ之旨、庄兵衛殿被仰渡候 文化四卯九月朔日御扣共四通庄兵衛殿江差出ス、同十月十一日先

ニ付承付返上

近江守殿

御中間御供組頭羽織増之儀奉願候書付

月番

西丸兼勤

御中間御供組頭

Ŧ.

右平日当番幷御厩向見廻り其外御馬出方有之候節々、 御仏参・遠 御成御供も相勤候御役羽織・茶縮緬給羽織 差添罷出

人江壱ツ被下置候、然ル処近来者山里御馬御稽古始り其節々差 御本丸ニ而毎年五ツツ、夏冬両度被下置候、西丸ニ而者冬計五

組頭 度々 添罷出 者五人江隔年ニ壱ツツ、請取候割合ニ相成候間、 何卒以来今弐ツ御増都合三ツ御渡被下候様仕度奉願候、 迄壱ツ受取候義ニ候得者 江壱ツニ而者不足ニ御座候 者弐ツ御増被下候様仕度奉存候、 成丈差略為仕勘弁仕、 上覧・駒場 仕 向懸合其外等も出情幷遠 候ニ付同役共評議仕候処何様山里御馬御稽古も繁々相成 御座候間 『候御役羽織以来者三ツ宛被下置候得者格別難有仕合奉存候 〈度々牽人差引等骨折、 且近来ハ (両人程も新規被 相願候得共先是迄之通 候、 右ニ付 彼等申立ニ者五人江五ツ請取度旨相願候得共、 御 成之節者五人ニ而者手足不申候ニ付、 両丸様御同日 西丸御分毎年羽織五ツ宛被下置候様私共迄 是迄之人数二而兼勤為致候得者羽織之儀 仰付候様申上も可仕哉ニ候得共、 早出・ 御本丸御同様二者難相願奉存候二付、 御成之節御人出方等之儀も万端世 二而相勤候様申渡候、 御本丸受取方五ツ 居残り等も仕万端差略仕、 当時之御振合二而者一躰五人 御成も度々有之、 是迄壱ツ被下 **乍併度々相願** 西丸ニ而壱ツ 就中水馬 西丸御供 先ツ可 左候得 御厩 殊二 是 話

何卒右之通御増被成下候様仕度奉願候、以上

卯九月

大林粂右衛門小島由右衛門

「七拾五

奉願候覚

一、私共是迄申合候而御注進等御間ニ合来候処、先達而定式(御成も

被 候 度々足シ申立罷出候者勤方心得不申候得ハ行届兼、 候得者、 こ合候様仕度奉存候間、 差合等御座候節者足シ申立 被 Ł 而者同役共不調法之程も奉恐入候之間、 四人宛勤番仕候得者、 欠可申哉与同役共一同奉恐入候、 間違等も有之、 仰付可被下置候様 仰 茁 以来者 [候、 吹上 又者勤方も心得不申候義御座候得者却而御 御成之節々御間も欠申間敷与奉存候 御 庭 定式 同此段奉願上候 何卒同役共三人御増人被 候而御間 御成も度々有之候ニ付、 御成 依之以来者 こ合候得共、 御庭 以上 何分ニも三人御増人 御成之節者御 御本丸之通平 其節々申立候 御間も欠申 仰付被下置 同役共病気 御 間 間 成

文化四卯年七月

西丸野方御使之者

是日言新月安 本半十郎殿 本半十郎殿 市職長之助 山崎清五郎 田子之助 野田勇次郎

河守殿被仰渡候段庄兵衛殿被仰渡候付、承付いたし翌十二日返上卯九月朔日桜井庄兵衛殿江差出ス、同十月十一日願之通可申渡旨駿小島由右衛門殿が島由右衛門殿が高井上郎殿

候処、 出 同 御 西 座候 \exists [丸野方御使定人数六人御座候処、 候 西丸野方御使增人之儀申上候書付 当年より者毎月御定式 是者平常之事ニ付 御 成も度々有之、 御本丸より御雇仕御間ニ合せ候得共、 其節者諸向より御人御雇仕御間ニ合せ 御本丸より御雇も難仕候 御入も有之、 遠 御 i.成之節者一 其節者五人ツ、 近来 六人之内 両丸様御 向不足こ 罷

印印印印印

節者 存候、 仕度奉存候、 之者六人ニ而者一向手足り不申候、依之以来三人増人申付候様 両丸様御同日 三人増人申付候而も遠 已之儀ニ而御人者内役之者より申付候得者御差支無御座候、 病気差合等も有之時々御人不足仕候ニ付以来三人増人申付度奉 御本丸御使之者拾九人二御座候、 御本丸より助人為仕御間ニ合せ申候、然ル処近来者 左候得者単羽織夏冬両度請取候節々三ツ宛相増候、 左候得者単羽織三ツ増受取申度奉存候、 御成御座候二付 御成之節者迚も不足ニ御座候得共、 御本丸よりも多ハ難差出御 是者見合候得者西丸御使 此段奉願 是而 勿論 其 座

卯九月

候、

以上

小島由右衛門

大林粂右衛門

卯十一 月五日御扣共四通差出ス

近江守殿

西丸御用 |賄方江御断

月番 三宅市右衛門桜井庄兵衛

西丸野方御使之者

番罷出候間、 右者是迄三人勤番御座候処、 被下候、 以上 日 々夕御台所壱人増被下候様御賄方江御断被仰渡 此度增人被 仰付候ニ付四人宛勤

卯十一月

御中間頭

(朱書) 五十七の下与組合」

电 卯正月十日次兵衛殿御泊ニ付御呼出申口上添差出候処、 仰聞 至極尤之

乍去一ト通御評議之上御左右可被成旨被

御挑灯之儀奉願候書付 御城内 御成之節御注進之者

御中間

頭

遠 御成之節者御注進之者弓張御挑灯相用申候得共 御城 内

御

御挑灯奉行江被仰渡可被下候、 弓張御挑灯為相用候様仕度候、 成之節者御挑灯用不申、 坂等有之候場所危御座候二付、 左候ハ、御挑灯・蠟燭請取之義 此段奉願候、 以上 以来

卯正 月

御中間頭 大林 条右衛門 小島由右衛門

(朱書)

卯十一月廿日左衛門殿江差出ス

口上之覚

相渡候与申儀幷伺済之趣も御達御座候様御掛合可被下候、 御懸合、 御勘定申聞候由在方出役之者申立候、 申旨申聞候由、 方二而銀相場相立候ニ付、 致度段出役之者より懸合候得共、奉行衆より御達者不致旨掛り また其沙汰も無之候、御勘定奉行衆より御目付衆迄達有之候様 在方出役之者 御成之度々罷出候御手当毎月請取候処、 此度何程之銀相場二相立候間、 左様之儀ニ候ハ、頭共より達申渡も可有之義 当四月分より銀違請取過之分引落 依之何卒御勘定奉行衆江 以来右之相場二而御手当 御鷹之

申義如何之訳御座候哉、 十一月分より者其趣ニ相心得可申候得共、四月分より引落候与 此段も御掛合可被下候、 以上

卯十一月

御小人頭

(朱書) (朱書)

卯三月十五日近江守殿御書付与左衛門殿御渡二付承付返上

御目付江

山本作次郎 御中間

御掃除之者

岡島幸次郎

右老年迄年来無懈怠相勤候二付御譜代被 仰付候間、其段可被

申渡候

翌十六日

、右二付小林五兵衛組山本作次郎幷末次佐吉組岡島幸次郎義銘々 頭々召連罷出、 本明ケ与左衛門殿江御徒目付組頭小沢伝之丞を

以申上候処、右両人共中御廊下於御用所前右御書付之趣左京殿

立合与左衛門殿被仰渡、 小沢伝之丞立合ニ罷出候事

卯六月廿七日近江守殿御書付

御目付江

「神谷兵太夫組」 他谷錠之助

右長崎奉行手附書方出役可被申渡候、尤長崎奉行可被談候

「八拾」 (朱書)

卯八月晦日御渡

御目付江

白山御殿跡小林吉十郎拝領屋敷

根来平左衛門組与力西丸御裏御門番之頭

高倉庄兵衛江

百拾六坪余

高倉庄兵衛拝領屋敷

巣鴨火之番町

福島伝兵衛組同心西丸切手御門番之頭

石川利兵衛江

弐百弐拾五坪

同所 石川利兵衛拝領屋敷

百坪余

右願之通屋敷相対替被 仰付候、 御普請奉行江可被談候

右摂津守殿被仰渡候段、金右衛門殿立合隼人正殿被仰渡候事

「八拾壱」

卯八月篠崎源太夫より差越、 承付返却

御目付衆

近々王子筋 御成之節御同所江保之丞殿・要之丞殿ニも御先江

御出二付、 左之通及御掛合候

御当朝保之丞殿・要之丞殿ニも 御成以前御屋形より御先江下 右近江守殿被仰渡候段金右衛門殿立合、主膳殿被仰渡候事

、右二付翌朝長崎奉行筒井和泉守宅江組頭藤九郎差添用人竹田喜 左衛門江引渡、 其段口上ニ而御当番与左衛門殿江申上候事

御目付支配無役

小林吉十郎江

駒込植木屋新之助方江御越御扣被成候事

但植木屋新之助方江御出被成候与御場内御供之分計残置、 余之御供者御目障ニ不相成方江差置候様御差略可被成事 其

保之丞殿・要之丞殿御出殿を附人田安・清水江御出置御申込可

被成候事

公方様下駒込植木屋長右衛門庭 被成相済、 所に植木屋・花屋共庭 通抜被遊、 御機嫌次第御膳所迄御一所二御出被成候事 同所庭内ニ而 御通抜ケ、夫より鶉之御羽合等御見物 御対顔有之、夫より御機嫌次第御 御通抜、 夫より新之助庭 御

但家老・御守用人・小性・近習番者 御本丸奥向御供之跡よ

り致御供候事

保之丞殿・要之丞殿御場内御供之分ハ二段御供之跡より罷越 其余御供ハ 御本丸惣御供之跡より 御目障ニ不相成候様

御膳所江差出可申候事

但 御膳所江差遣候御供之分、御鳥見方二而作略為致候

保之丞殿・要之丞殿、御茶弁当・御水弁当抔ハ 御目障二不相成候様差遣可申候事 御本丸初段御

供之跡より

保之丞殿・要之丞殿、 江御出可有之候事 膳所宝持坊・池上坊より 御膳所金輪寺

御膳所相済又々御一所二而染井花屋小右衛門方二而御暇乞相済? 込植木屋庄八庭 保之丞殿・要之丞殿とも同所江御残 御通抜 還御被遊候間 公方様ニ者夫より上駒 還御相済御見計

小右衛門方より御帰殿被成候事

保之丞殿・要之丞殿惣同勢場為取締、 右場所江御小人目付壱人

出役有之候樣可被成候事

江 右之通御心得、 御成之節、 尤其外之儀者諸事去寅年十月九日保之丞殿王子筋 御出之節之御振合二而御心得可被成候、 以上

八月

長谷川主膳正

「八拾弐」

趣難相成旨、 文政二卯九月三日御月番左京殿江差出、 駿河守殿被仰渡候段左京殿被仰聞候而 同七申年五月廿二日願之 書面御下ケ

被成候間承り附いたし御同人江返上

御中間大縄屋敷御引替之儀奉願候書付 月番

覚

御中間大縄町並拝領屋敷

巣鴨原町

惣坪数四千五百坪

九百七拾五坪

小宮山作右衛門組

九百坪 弐千六百弐拾五坪

小林五兵衛組

神谷兵太夫組

物坪数七百五拾壱坪五合本所中之郷新町

百七拾坪壱合

小宮山作右衛門組

三百三拾坪五勺

小林五兵衛組

当

時全て弐百四拾八坪八合 此内壱人分八拾壱坪弐合五勺先年上り地ニ相成、

2 - 5

弐百五拾壱坪三合五勺

神谷兵太夫組

此内壱人分八拾壱坪弐合五勺先年上り地二相成、 当

時全て百七拾坪壱合

ケ遣 不宜、 領仕、 右御中 無 中 時ニ而ハ預り度旨願出候者も至而稀成義 取続ニも相拘り、 者共ハ往返難義中々難相勤 度旨相願候者も御座候節者前々之仕来を以仲間並之坪数割渡預 等相掛り、 少分之儀ニ有之、其上町並を以公役銀・名主役料・其外町入用 之儀ニ而住居仕候者も少く、 共江貸置、 町之分三組合人数九人分、 拝領主有之候分六人有之、其外者拝領主無御座、 家 書面之坪数天和三亥年十月拝領仕、 篽 -間組江御渡被下置候屋敷之儀ニ御座候間 和用金地与唱組役之者江地面引受世話為仕、 勿論右場所御中間御抱入者等二而無屋敷之者、 御免被成下候趣二而、 座候間 坪数減少仕 候得共、 当時拝領主有之候分四人、其外者拝領主無御座, 差引上り高者至而僅成事ニ而組入用与申名目而已之儀ニ有 間 大縄屋敷之儀、 地面上り高を以組入用ニ仕候場所ニ御座候処、 別而巣鴨原町兵太夫組筋者坪数多二御座候得共場所 .何卒両所共相応之町屋敷与御引替被下置候様仕度 住居仕候而も |候而も不苦、 其上預り候而も却而失脚も相掛り候趣ニ付、 巣鴨原町之分三組合人数六拾人分, 右場所之内其砌割渡候義与相見、 是又書面之坪数元禄十丑年七月拝 過半明キ地ニ相成居候間上り高も 場所之儀も壱ヶ 御城迄五拾町余有之、平生繁勤之 自然与借地等も仕候得者小給之者 元禄九子年二月廿九日 二御座候、 可相成義二御座候 所 家守共附置町人 本所中之郷新 限り候義こも 時宜ニ寄預り 右二付従来御 前々よ 場末 当時 当 町

> 此段奉願候、 以上

卯 九月

神谷兵太夫小林五兵衛

右御 出共三 通 別紙御扣共弐通都合五通

別紙

奉願候訳合之儀左二申上候 巣鴨原町・本所中之郷新町 ?御中間大縄屋敷御引替之儀

趣二而、 替奉願 之者之義難儀仕候、 追々御抱入等被 得共其儘持来候向多有之、 丸山 御茶之水元町之分者慶長十一午年拝領、 外江御引替二相成候趣之申伝二而年久敷儀故書留等無御座、 等相知不申、 御中間組大縄屋敷之儀 之者より追々他場所江転役仕、 譜代之者ニ而、当時大縄拝領屋敷与相唱面々持来候処、 領之砌頭々より壱人別ニ地面割渡候趣相聞、 所中之郷新町同十丑年七月拝領仕、 十月拝領仕、 丁目・三丁目共元和二辰年拝領仕、 大縄屋敷之儀ニ付御引替奉願、 同追分、 右三ヶ所共元禄九子年二月廿九日町家 願之通御引替可被下候問 御普請奉行奥田八郎右衛門・堀小四郎より請取候 於神田三河町幷駿河台拝領仕候由ニ而、 其外大縄屋敷被下候儀年月等書留相見不申、 仰付候者者無屋敷ニ而借地住居仕候故、 勿論御取立被 御入国之砌三州より御供仕候以後年月 御中間大縄屋敷次第ニ相減シ、 結構御取立被仰付候者者御中 元組江御戻相成可然筋二御座候 巣鴨原町之儀者天和三亥年 所者見立相願候様被仰渡候 湯島天神前 仰付候者之内二者屋敷御引 本郷春木町壱丁目・ 右之分者何れも御 御免被成下、 同切通・本郷 其後御曲 右御譜代 小給 其後 本郷 蕳 拝 弐 本

御座、 罷成、 為被 新規御抱入等も申上、尤右御抱入之者ハ病死又ハ病気附相勤 ども多、右無役之内より御奉公出仕候者者少々年々御中間御定 寄心得違不束之者抔間々出来仕、 之者全之不如意ニ而難相勤儀者何とも歎ヶ敷奉存、 同与者乍申、別而小給之者之儀甚困窮難儀仕、内訳申上候茂奉恐 並高而已二而相勤候場所多、近来米価下落仕諸色高直二而世上一 兼候儀二付、無屋敷之者者猶更難渋仕、其上御中間之儀者外向与 候得共、屋敷有之候而も場末其外不宜場所拝領仕居候者者取続 拝領屋敷有之候者之内場所柄宜分持来候者ハ格別人数多ニも無 而被下置候趣に有之、本郷元町之儀も元録十六未年十一月類焼 切通当時棟梁屋敷之辺御用地二被 小人等拜領屋敷町家二被成下候者、 屋敷持来罷在候二付元組江可相戻様も無御座、一躰御中間・御 者も御座候得共、 不申節者御切米差上候儀二御座候得共、 ク勘弁ヲ以取扱世話仕候得共多人数之儀行届兼、其内ニ者品 右故自然与不勤勝ニも罷成、 入候得共、取続兼候者共者手細工其外内職を専ニ仕候哉ニ相聞 人数相減候様罷成、 西御丸・二丸向御門番幷御厩勤、 同年十二月川岸通御用地二被 其外所々御引替等も御座候趣申伝ニ而、 仰付候御趣意之申伝有之候処、貞享年中右大縄之内湯島 尤右之者共ハ地面上り高も相応ニ有之候故取続情勤も仕 可奉願相応地所も無御座候得者矢張大縄拝領 出方多之節ハ御差支ニも相成候故、 別而 或者病気附無役入等相願候者 畢竟小給之者御奉公取続之 御代古ク被 召上其後右之場所武士地二 或ハ仲ヶ間触番役之者等 召上、為替地本所横川ニ 実々厄介等も有之候者 当時御譜代筋ニ而 召抱御譜代筋 勿論精々厚 其度々

> 奉存、 仁恵を以願之通相応之町屋敷与御引替被下置候様仕度、 得者新規御抱入等も不申上候様ニも可相成奉存候間、 取続之為手当全ク並高ニ而相勤、 儀に付只今迄之通仕置、 筋ニも無御座候、 之御人ハ自然相増候様罷成、乍小給之者往々御宛行相殖御益之 又別紙を以偏ニ奉願候、 候者共其勤場所ニ応シ夫々割渡遣候得者一同之励ニも罷成難有 通相応之場所江御引替被下置候得者、 ハ兼而被仰渡之趣も御座候間、 自分精勤も仕無役より御奉公出仕候者も出来可仕、 依之巣鴨原町・本所中之郷新町大縄屋敷願之 以上 右地面上り高を以已来組之者共御奉公 其節伺之上跡抱申渡候二付一 或者無屋敷等二而実々難儀仕 組入用者是迄迚も少分之 乍恐 此段猶 躰 御

卯九月

御 中間頭

「八拾三」

跡目願之儀二付申上候書付支配調役下役三橋勝十郎

高三拾俵三人扶持

外 内 拾五俵弐人扶持 役扶持三人扶持 御足高 本高

実子物領 三橋鉄之助 父手前 : 罷在候 三橋辰之助

名

松前奉行

支配調役下役 三橋勝十郎 辰五十壱歳

候、 鉄之助江跡式被下置候様仕度、 置候樣願置、 病死仕候 此節浮腫強罷成、 去々寅七月中より疝積相煩種々療治差加え候得共薬験無御 右勝十郎儀、文化元子年蝦夷地江家内召連罷越在勤仕罷在候処、 以上 ハ、実子惣領鉄之助江取来候元高御切米御扶持方被下 当 次第相労病躰差重本服可仕躰無御座候間、 月 日病死仕候二付勝十郎願置候通実子惣領 依之勝十郎 由緒書相添此段奉願 座 若

辰 月

高橋越前守夏目左近将監

鉄之助在住出役之儀申上候書付 支配調役下役相勤候三橋勝十郎 倅

高三拾俵壱人扶持

高橋越前守

夏目左近将監

支配調役下役 三橋勝十郎

実子惣領

三橋鉄之助 三橋鉄之助

召連引越相勤罷在候処、 江御抱入被 右勝十郎儀、 仰付、 寛政九巳年五月従部屋住御中間浅岡平八郎組明跡 文化元子年蝦夷地在住被 養父三橋弥左衛門病気ニ付願之通隠居 仰付彼地江家内

座 御 引越在勤仕、 月支配調役下役被 座候処、 仰付、 蝦夷地在住より拾七ヶ年彼地ニ罷在、 此節ニ至り浮腫相生シ次第ニ病気差重、 去々寅年より疝積相煩種々療養仕候へ共薬験も無御 跡式被下置候旨水野出羽守殿被仰渡、 辺土之地をも不相厭出情相勤、 仰付、 当辰年迄都合弐拾四年御奉公相勤候 奥蝦夷迄も家内召連 本服可仕躰無御座 殊二御用立候者二 同十五寅年二

> 仰 迄数年勤方仕候甲斐も相立候儀ニ付、 府仕候而者道中入費も相掛り難儀仕候間、 住出役被 然処鉄之助儀年齢ニも罷成殊ニ筆算等も相応ニ仕候ニ付、 者彼地ニ引続在住仕罷在厄介も養育取続方茂仕、 会所勤向為手伝諸書物等為仕置候処、 候ニ付若病死仕候ハ、跡式倅鉄之助江被下置候様別紙奉願 人物ニも罷成候間、 付候様仕度、 仰付候様仕度奉存候、遠路之処小給之者厄介召連帰 此段奉願候、 父勝十郎跡式被下置候ハ、引続蝦夷地江在 以上 此節者事馴一廉御用立 旁前書之通在住出役被 右之通被 其上勝十郎 仰付候得 兼而 候、

候

是

辰 月

江 儀其段三右衛門殿江申上相返シ可申旨申 江御入人ハ猶更、 彼方ニ而申上候儀者勿論之事、 御 式被下候而も身分之格合相立不申、 候間松前奉行江引渡功之もの故、 右書面松前奉行より差越右之通申上候而も差支無之候哉、 相咄し其後何之沙汰も無之候事 .中間共無役入与か不致候ハ、如何可有之哉と御部や清庵申 無役入も難相成筋之旨同人江相答候処、 蝦夷地ニ罷在候もの 書面之通跡式願・ 倅鉄之助 ハ出役之 事故何 聞 候、 尤口 ゆへ御中 出役願とも 上 三而清 尤跡 尤之 曺 崩 n

羽守殿御渡四郎兵衛殿

御目付江

松前奉行支配調役下役 勝十郎実子惣領 三橋鉄之助

右鉄之助儀家督被下、 何レも支配無役ニ成候間可被其意候、(得服力) 尤

松前奉行江可被談候

辰十二月十六日

一橋鉄之助

斎藤栄八郎 松前奉行支配出役

同断調役下役元締格 井上杢左衛門

辰十月廿一日出羽守殿江田中竜之助を以左近将監より上ル 在住之儀申上候書付支配調役下役相勤候三橋勝十郎倅鉄之助 夏目左近将監 高橋越前守

支配調役下役

三橋勝十郎 辰五十歳

実子惣領

三橋鉄之助 辰弐十歳

仕躰無御座候二付! 共薬験も無御座、 用立候者ニ御座候処、 奉公相勤候内、 十五寅年三月支配調役下役被 召連引越相勤罷在候処、 江御抱入被 右勝十郎儀、 も家内召連引越在住仕、辺土之地をも不相厭出情相勤、 仰付、 跡式被下置候旨同四卯年水野出羽守殿被仰渡、 仰付、 寛政九巳年五月従部屋住御中間浅岡平八郎組明跡 蝦夷地在住より拾七ヶ年彼地ニ罷在、 此節ニ至り浮腫相生シ次第病気差重 若病死仕候ハ、跡式倅鉄之助江被下置候様別 文化元子年蝦夷地在住被 去々寅年より疝積相煩、 養父三橋弥左衛門病気ニ付願之通隠居 仰付、 当辰年迄都合弐拾四年御 種々療養仕候得 仰付彼地江家内 奥蝦夷汔 本服 殊ニ御 同

> 之訳を以鉄之助在住被 支配向人数減之儀取調相伺候砌、 夷地在住被 付、 紙奉願候、 付候得者右明跡も出来仕、 難捨置者ニ御座候処、此度在住水谷茂十郎儀願之通下役被 七ヶ年彼地江相詰、 二付其後追々在住相減候得共、右鉄之助父勝十郎儀前書之通拾 用立候人物ニも罷成候間、 兼而会所勤向為手伝諸書物等為仕置候処、 然ル処鉄之助儀年齢ニも罷成筆算等も相応ニ仕候ニ 仰付候様仕度奉存候、尤文化十二亥年三月先役共 辺境ニおゐて病死仕候程之勤向も御 仰付候様仕度偏二奉願候、 人数相增候儀二無御座候間、 父勝十郎跡式被下置候ハ、引続蝦 在住明跡之儀者減切二仕候積 此節 以上 ハ事馴一廉 旁格別 座 候間 仰

辰十月

四日右勝十郎儀者調役下役ニ相成此方組を離候者ニ付、 物等も有之候ハ、取調差出候様同人を以被仰聞候、 五日比右願相済候由、 者猶更難相成旨清庵江相咄し 目 前奉行より跡式願引続在住願下書扣相廻し、 次郎江も相咄し置申候、 次第相渡、 松前奉行方ニ而申上、在住願も申上候而可然、此後上より被仰渡 右書面辰十二月二日左京殿梶川清次郎を以御渡、 之旨掛合有之処、 日弐通松前奉行江返却相成、 三候得共、蝦夷地ニ罷在候者故右等も難相成、 外書面当時差出候ニ不及旨左京殿江私より申上、 右倅跡目被 尤右願書之振合を以此方ニ而も可差出 然ル処右勝十郎倅在住之儀ニ付当春松 其後何之沙汰も無之候、当春右様 同人より三右衛門殿江申上、 仰付候得者無役入被 此方差支ハ無之哉 御中間江御入人 右勝十郎当月 右ニ付同 仰付候筋 跡式願 清 月

候間、 引続在住者無役より在住ニ相成候、 衆撰之上被致候事故慥成義二付、 者を名代ニ而御支配入為致候処、不当之儀与奉存候間、右者奉行 同様尤之取計と被存候、 故為致出府候上右申渡引渡等可致処、 右名代之者江申渡、 御書付も御目付江出可申奉存候、 勝十郎倅名代江申渡侯由二御座侯、 下候ハ、無役入被 上よりハ如何被仰渡候哉難計候得共、 乍併進達も相済被仰渡も五日六日頃ニ者相済可申内沙汰之上者。 く進達之後奉行より左京殿へ右此度之下書相廻候、無詮事ニ候 又々問合候得者、 有之候得者又々差支之有無答致し候上、 内問合有之答致し候上、此度在住願弥差出し候節、又々内問合 彼地二其儘差置候而取計申渡、奉行衆江骨折候由此方二而 当春之答之通聞届不致訳之故哉、 仰付候者与被存候、左候ハ、松前奉行ニ而者 彼方江引渡可申候、 乍去無役入被 名代二而不苦儀与奉存候、 左候ハ、此方ニ而も在住之儀 右申渡茂名代之者江可申渡義 然ル処直ニ在住被 少給之者遠路之儀ニ而も 勝十郎跡式倅鉄之助江被 尤当人蝦夷地在住候事 仰付候ハ、不見不知之 彼方二而進達可致処 何之沙汰茂な 仰付候

与奉存候趣与清庵幷清次郎ニも相咄し置申候取計ハ御中間頭一躰ニ候間一存ニも難取計、同役相談之上之事取計へので表現計可申渡哉ニ被存候、乍併無役入ニ相成候後、

之心得申渡、引渡等名代ニ而相済候心得ニ御座候、松前支配向牛袋理太夫江問合候処、彼方ニ而も無役入引続在住

遠国在勤中御役替等被

仰付候得者彼地江御奉書二而申参御請

所ニ例等も有之候哉相知不申候参り候由、又名代ニ而被仰渡相済候哉とも相咄し、是者御勘定

助追而出府為致御中間江御入人直ニ在住と可仕哉ニ奉存候如追信、此度も無拠右之例ニ致、勝十郎倅鉄之文化二丑年六月御小人江御入人申上被の付、長崎書方是迄之文化二丑年六月御小人江御入人申上被の付、長崎書方出役、 原子二月父跡式被下置無役ニ成、享和三亥七月長崎書方出役、無役より出役者難相成筋ニ候得共、先年豊田源二左衛門寛政七

申渡文通被差遣名代より申達候由ニ御座候御小人頭中山金三郎勤役中名代之者江申渡、別段頭より当人江方出役より手附出役被が仰付候節、弥次助長崎表ニ罷在候ニ付海小人兼松弥次助儀、文化十二亥年三月十七日長崎奉行手附書

是は下役倅にて逢茂不致者名代ニ而引渡候、左之通可然哉右等を例ニ致し可然哉、右ハ元より御小人之事故頭存知之者

右之通御座候、以上

辰十二月四日

千

右

衛

門

座候間、 も差出間敷、 等ニ候得共、 付、 以是迄之通在住被 処左京殿梶川清次郎を以、 役江小林氏引渡相済候上者廻状面ニ而御承知之儀与奉存候、 今六日三橋勝十郎倅鉄之助無役入被 小林氏左京殿江面談致し、 右様相成候様仕度旨申上候処、左京殿被申候者筋合者 格別左も無之候得者難相成筋合之段申上、 去年中御代官手附上より直 仰付候樣仕度段願書差出可申旨被仰聞候二 右無役入ニ付而者鉄之助義父勤功を 無役より者直ニ出役等難差出用除 仰付、 二御書付出候振合も御 名代之者ニ而世話 書面等 然ル

依之無役より出役願之儀下書者今日跡より取調御廻し可申候得 翌日ニも早々差出候へ者御書付即日も相下候由、 日も相立可申旨御答申候処、 こも不参、 筆所幷奉行衆様御内談御請合も有之故哉と被存候間、 二御同役中厚く御評義も可有之間、 出等ニも難相成候得共、此者者格別之訳故以来之例ニ者不相成様 之、此度之儀も右之振合ニ相似たる事ニ而、一通り無役より御役 守殿向一統無役入之者抔者無役より直ニ御役出等被願候義も有 之支配故右勤功ヲ思ひ此方ニも願之方相当之訳ニも有之、既ニ御 左候得共父勤功も格別之事ニ而、 、右ニ付而定例無役より願候ニ者世話役より願出候上私 此段為御承知先江申上置候 左京殿御内存も是非願書御目付方よりも差出可申抔、 頭共一同評儀致候事ニ付右手続ニ而経候得者、 至極手続通之儀尤之旨被申、 当時無役入二相成候上、 申談候通取計候樣御申聞 御物語有之由 左様ニ候 五日六 此 乍去 御右 一存 方

候間、 之所申出候間 趣意相立候様可致、 候義可有御座、 御内覧二入可申旨申上候、 より清庵江咄置候用役申付候上、 同八日願書下書取調左京殿江内覧二入候処、 申聞旨被仰候間、 、熟し切居候事故何れニ而も宜敷旨被仰候、 何れ其御方より者右之通被仰上、此方ニ而者願書下書を以 何れ御賢慮次第与申上候処、何れニも都合宜敷 通り懸合候上明九日拙者宅江否可申出旨申聞 至極此方之願書二而宜敷旨、 平四郎江右之段懸合候処、 則右之通申上、 出役与申義平四郎よりも申聞 猶世話役よりも申上 至極宜敷旨何れ上 尤世話役五左衛門 五左衛門義用役 猶世話役江打合

付返上

候間、 此方願書下書写差遣申候事

在住出役奉願候書付御目付支配無役用役より蝦夷地 月番 酒井作右衛門 花村忠兵衛

御譜代之者

勤仕並 勤仕並 三橋鉄之助 三橋鉄之助

御

右鉄之助儀、 高拾五俵 壱人扶持 父跡式被下置御目付支配無役被 仰付候処、

前奉行奉願候通鉄之助儀直二在住出役被 十郎儀蝦夷地在住拾七ヶ年出精相勤候者之儀ニも御座候間、 仰付被下置候様奉願 父勝 松

候、 以上

辰十二月

無役世話役 御目付支配 御中間頭

辰十二月廿二日駿河守殿御渡

御目付江

御目付支配無役 三橋鉄之助

右駿河守殿被仰渡候段、 右蝦夷地在住可被申渡候、 四郎兵衛殿立合忠兵衛殿被仰渡候書面 尤松前奉行江可被談候

、右二付鉄之助名代之者、 松前奉行支配吟味役柑本兵五郎江引渡、 可申渡旨世話役平四郎江申遣、 右鉄之助名代千右衛門組三橋国五郎江平四郎立合之上申渡相済 明廿三日四時 翌廿三日 其段御当番作右衛門殿 御城中之口江罷出候様 御城中之口ニおゐて

江平四郎同道ニ而申上候事

但当朝夏目左近将監殿被逢右引渡方手続如何致候哉之旨談二 取計、後刻国五郎江文通為持兵五郎方江遣候事 趣御申聞二付、猶同人江対談可致旨申答候上同人江引合ひ 由之処名代之もの未罷出候間、 **候処** 御成相済諸向早引ニ付、奉行吟味役も最早退散可致 付、於中之口御支配向江引渡候段申之候処、兵五郎罷出候 口上二而引渡受取相済候積

、名代之者より彼地鉄之助方江被仰渡之趣申遣、承知之旨返書来 候処、松前奉行支配向とも御礼廻りいたし候方之旨兵五郎申聞 但名代国五郎より鉄之助江之文通ハ十二月廿四日松前奉行江 右ニ付御目付方御礼廻り計世話役定例之通為申渡候

「八拾四」 「八拾四」

差立候由ニ付相頼遺候事

覚

大林 惣兵衛

江可被談候 右惣兵衛義病気ニ付願之通蝦夷地在住可被差免候、尤松前奉行

右御書付子閏八月廿六日小笠原近江守殿被仰渡候旨、 御当番御目

付花村忠兵衛殿被申渡候

「松前奉行支配吟味役」柑本兵五郎、 配調役下役大塚惣太郎江申渡引渡相済候事 物兵衛名代松前奉行支

子閏八月廿六日御下ケ承付返上

御目付衆

服部伊賀守

覚

中山金三郎組 御小人 大林惣兵衛

下役大塚惣太郎江申渡候、此段及御達候 今廿六日若狭守殿被仰渡候二付、其段惣兵衛名代之者支配調役 右惣兵衛義病気ニ付、願之通蝦夷地在住 御免被 仰付候旨

子閏八月

「此書付為心得取置!

御書付を以被仰渡候段、御目付大河内善十郎立合水野中務被申 文化五辰年正月廿六日蝦夷地在住被 仰付候旨、堀田摂津守殿

渡候段小永井安之丞申渡候

蝦夷地在住之者出役 御免之儀申上候書付 本多淡路守服部伊賀守

| 此書面役方より廻り候哉、留メ右同[編書]

蝦夷地在住

御小人中山金三郎組

大林惣兵衛

仕御奉公難相勤躰ニ御座候間、 (^{不脱カ)} 勤罷在候処、去冬以来痰癪相煩種々療養相加候得共、兎角快気 右惣兵衛義文化五辰年蝦夷地在住被 御免可申渡哉与奉存候、 此段奉伺候、 在住 御免之義相願申候、 仰付、彼地江家内引越相 以上 依之

大林惣兵衛

子閏八月

子九月十五日摂津守殿御渡

御小人

大林惣五郎

「八拾五」

右摂津守殿被仰渡候段、

助右衛門殿立合忠兵衛殿被仰渡候事

尤松前奉行江可被談候

增被下候様奉願上候 申私共難渋仕候間、

以上

文政二卯年九月

減二相成、

壱ヶ年金弐両受取来候得共当時御用多ニ而引足り不

先々之通御中間方・御小人方ニ而金壱両御

十二月壱両弐分受取候趣ニ御座候処、

度々御明

御殿二相成

積ニ而、壱ヶ年御中間方・御小人方より金三両之内七月壱両弐分、

右蝦夷地在住可被申渡候、

文政二卯九月廿七日御長屋御門番世話役池内長右衛門差出

奉願上候覚

勤罷在候処、 御長屋御門番市江与惣次義年来相勤候二付、 此度与惣次義退役仕候間、 右代桜井甚五右衛門義 泊用捨被 仰付相

是迄年来相勤候二付、 何卒泊用捨被 仰付被下置候樣同役共

同奉願上候、 以上

卯九月

御長屋御門番

神谷兵太夫様 小宮山作右衛門様

右願之通卯十月四日桜井甚五右衛門義泊用捨申渡候事

(朱書)

文政二卯九月廿九日小林五兵衛方江差出候由同人より相廻ル

奉願候覚

西 「丸御小人目付部屋江請取候用金之儀、 先年者壱ヶ月金壱分之

(朱書)

御目付江

小普請米津小太夫組 栄次郎実子惣領 高橋捨次郎

右捨次郎儀、父家督被下何れ茂支配無役ニ成候間可被得其意候、

尤小普請組支配江可被談候

合無役世話役江例之通引渡、 右大炊頭殿被仰渡候段、 主膳殿被仰渡小沢伝之丞申渡、 小普請世話役大塚亀次郎出席、 兵太夫立 捨次

郎名代平島西右衛門罷出候事

「八拾八」

備中守殿御渡御書付市左衛門殿御下ケ被成候旨、 正木伴蔵相達五

役承付之上御徒押江相廻ス

元清水勤番小普請等より諸向江御入人ニ相成、 当時相勤罷在候

高津茂十郎 荒 井 平 蔵 印印印

神谷兵太夫殿 小宮山作右衛門殿

「八拾九」

n 者共病死等之節者向後 ·御入人有之向々江其段寄々可被達候 十二月 公儀二而跡抱 岢申 佇 候間 清

『水向よ

取 御用屋敷御門番人組頭同様着用為仕度、 重二相成候間 義平生示方ニも宜、 筆頭之義ニ御座候間格別之取締ニも相成、多人数引受世話仕候 内麻上下着用仕候二准候得者、 相勤候廉を以、 継上下着用為仕度、 下着用罷出候趣二付、 掃除之者組頭、 外御中間・御小人より筆下ニ而桜田御用屋敷御門番人組頭 奉行同心等前々之仕来二而、 守居同心組頭・二丸御番同心組頭・御鉄炮御磨同心組頭 来候得共、 諸向逢対組内他向引渡差添罷出候節々、 右者平生 も前々ハ麻上下も着用不仕候処、 御供組頭・御使組頭・御玄関番世話役等何茂其場所々々長 |組中諸願或者病気差合異変其外万事引受取扱、 組頭之儀者組内格別之長役ニも有之、外向ニ而者御留 年始・ 以来他向引合等罷出候節者前文同心組頭 右等之者も前々より諸向立合差添等之節者継上 殊ニ組内ニ而も御小人目付世話役・御用所頭 且ハ私共御役意も廉立、 右二見競候得者組役之義他向引合等之砌者 五節句 平生当番之節も継上下着用相勤、 御中間·御小人組頭之儀者組中惣 御祝儀等之節々前々より 組役廉も不相立組中取締之為 是迄自分羽織袴着用 既御駕籠之者組頭之儀 組中之取用方も厳 宗門改 ・桜田 · 御金 御城 御 其

> 候、 段御聞置被成下、 申上候通多人数引請世話差引仕候義ニ而取締ニも罷成候間、 可為仕旨村上監物殿被仰渡候、 節 メニも御座候間頭共より相願、 (八麻上下着用為仕度段去ル亥年十二月申上候処、 依之御内慮奉伺候、 他向引合等之節ハ継上下着用之義申渡度奉存 以上 年始・ 御中間 五節句・其外御祝儀等之 ・御小人組頭之儀も前文 願之通着用 此

辰正月

御小人組頭

御小人頭

済被成下候様尚又口上添差出候処、 奉行・同御簞笥奉行・御弓矢鑓奉行・御幕奉行・同心組頭之儀 右壱通正月廿六日隼人正殿江差出、 被仰渡候 :城内継上下着用罷出候義ニ付、 書面組頭之義も申上候通御聞 同四月廿四日左之通御附札を 尤右書面之外ニも御鉄炮玉

級も有之候得者、 書面御中間・御小人組頭他向引合等之節、 度旨被申立候二付一同厚及評議候処、 継上下着用之儀者難相成段可被申渡候 上下席・ 継上下着用為什 羽織席之階

江伺相済候二付附札之通可相心得、 文政三辰年二月廿三日隼人正殿江差出ス、 衛門殿被仰渡候二付、 願書江三役鰭附返上 尤御賄 同六月廿六日駿河守殿 頭江も相達置候旨与左

御附札之通被仰渡奉承知

中間頭

辰六月廿六日

御小人頭 近藤鯉左衛門 古沢茂右衛門

御駕籠頭 山崎又兵衛

奉願候覚

丸様 更行届可申哉奉存候二付、 存、 縁頰二而御台所頂戴仕候樣罷成候得者、 大暑又者寒気等之節難渋仕候義も御座候間、 限二寄候而者四之間御台所殊之外混雑仕、 相立候得者、 共義多人数之組御預ケ被置候儀ニ而、 頭·御掃除頭同様三之間御縁頰ニ而被下置候様奉願候、 席之内ニ而頂戴仕候義ニ御座候間、 御台所被下候席之儀、私共是迄四之間頂戴仕来候処組之者も同 頭役与組之者之差別も相立、多人数之組取扱方取締等も猶 御城内 自ラ御役意も厚く取締方ニも相響、 御成、俄二被 旁此段奉願候、 仰出候節御供相廻り候砌 可相成儀ニ御座候ハ 御台所席等組之者与階級 右様之節も一同難有奉 引支度等も間に合兼、 以上 前書之通三之間御 其上 、黒鍬 御刻 躰私 両御

辰二月

願之通以来御台所三之間御縁頰ニ而被下候間、 其旨可相心

得候事

須田与左衛門花村忠兵衛

「九拾壱」

奉願候覚

湯江湯治仕度奉存候、 湯治仕候ハ、宜可有御座与奉存候二付、 私儀久々痔疾相煩色々養生仕候得共次第二相募難儀仕候二付、 依之信州上之諏訪渋之

願候、尤小者壱人召連罷越候、願之通御暇被下置候様奉願候

何卒御憐愍を以三廻之御暇被下置候様奉

松永清四郎 钔

私養父清四郎奉願候通被 仰付被下置候樣奉願候

組合松永清四郎湯治仕度旨相願候二付立合相尋候処相違無御 松 永 林 平 座 钔

候間、 願之通御暇被下置候様於私共も奉願候、 以上

文政三辰年二月

成島惣次郎 杉 浦 一 郎

印印

神谷兵太夫殿

辰二月廿四日御月番忠兵衛殿江差出、 即日勝手次第与御同人被仰渡

神谷兵太夫組

御中間押

松永清四郎

以上

覚

右者病気二付信州上之諏訪江湯治仕度旨相願申候間申上候、

御中間頭

神谷兵太夫

御駕 御中間頭

辰二月

覚

同廿九日御当番忠兵衛殿江一雲を以差出ス

2 - 15

神谷兵太夫組

松永清四郎

届申候、 右病気二付信州上之諏訪江為湯治今朝六時板橋通出立仕候旨相 依之申上候、 以上

辰二月廿九日

御中間頭 神谷兵太夫

覚

日急度罷帰可申候、以上 戸表出立、往来・彼地逗留共日数三十七日ニ而、 頭仕間敷旨被仰渡奉畏、急度相守可申候、 私儀此度信州上之諏訪渋之湯江三廻之御暇奉願湯治二罷越候二 往来・彼地逗留中諸事相慎、 喧嘩・口論・権威ヶ間敷義毛 出立日限来廿九日江 江戸表江四月六

文政三辰年二月

松永清四郎 印

神谷兵太夫殿

二月廿七日組頭を以相渡

用紙程村竪紙、上包美濃紙折掛

横川御関所

御番中

御中間頭 神谷兵太夫

付、 拙者組松永清四郎小者壱人召連信州上之諏訪江為湯治罷越候二 御関所無相違御通可被成候、 為其如斯御座候、以上

文政三辰年三月

御中間頭 神谷兵太夫 印

横川御関所

御番中

辰四月六日御当番 江差出

覚

神谷兵太夫組

御中間押

右者信州上之諏訪江為湯治先達而罷越候処、 昨五日帰府仕候旨 松永清四郎

相届申候、依之申上候、以上

辰四月六日

御中間頭 神谷兵太夫

「九拾弐」

文政三辰年三月十日御扣共三通例書添月番与右衛門殿江差出ス、

同四月五日願之通近江守殿被仰渡候段、主膳殿立合市左衛門殿被

仰渡

承知仕候

書面願之通可申渡旨被仰渡

四月五日

神尾市左衛門

山本寿平拝借仕度奉願候書付元小普請中村丈右衛門上り地御中間 月番 大 草 主 膳

覚

本郷御弓町

借地住宅

右丈右衛門拝領屋敷

神谷兵太夫組 山本寿平 秋月大学組 中村丈右衛門

元小普請

拝領人有之候迄何卒右上り地面拝領仕度段相願申候間、(借) 相成候二付、寿平家作引払可申処小給之者二而難儀仕候間、 右丈右衛門儀、此度甲府勝手小普請被 仰付拝領屋敷上り地ニ 願之诵 追而

被 仰付被下置候樣仕度此段奉願候、 以上

辰三月

神谷兵太夫御中問頭

古沢常吉

借被 共方相障候儀無御座候、已上 地面拝領人是有候迄当分拝借地被 書面之趣吟味仕候処、家作引払難儀之趣申立当分拝 仰付候例も御座候間、 山本寿平願之通右上り 仰付候而も、 私

辰四月

鈴木相模守

例書

笠原五太夫組

厚貫与右衛門

仕度旨願書同月十四日月番成瀬吉左衛門殿江差出候処、同十月 (右) 卯年九月上り地二相成候ニ付、 右与右衛門儀、大久保四町目小普請木村源之丞拝領屋敷寛政七 拝領人有之候迄右与右衛門拝借

辰三月

九日願之通拝借被

仰付候段堀田摂津守殿被仰渡候、已上

御中間頭

大草主膳殿 須田与左衛門殿

鈴木相模守

神谷兵太夫組

上り地 本郷御弓町中村丈右衛門

御中間 山本寿平

間、傍示杭五本廻杭認メ候硯墨筆致用意印形持参、右場所江可 右寿平当分拝借地明後朔日晴雨共九時支配向差出相渡可申候

罷出旨御申渡有之候樣存候、以上

四月廿九日

右同日御普請奉行より之達書主膳殿閑徳ヲ以御下ケ承付返上、 即

刻山本寿平江申達候

大草主膳殿 須田与左衛門殿

神谷兵太夫組 御中間 山本寿平 鈴木相模守

上り地 本郷御弓町丈右衛門

向差出候処故障之儀有之、於場所致延引候処明後九日晴雨共四 ツ時支配向差出相渡可申候間、 右寿平当分之内拝借地去ル朔日相渡可申旨、 印形持参右場所江可罷出旨御申 先達而及御達支配

渡有之候様存候、以上

五月七日

付市左衛門殿江返上いたス

右与左衛門殿御下ケ之由ニ而竹内源右衛門より差越候ニ付、

致承

口上書を以申上候

同断仮役 御普請方改方 菅沼給右衛門

荒井源右衛門

同地割棟梁 同同心 青木作次郎 上野弥蔵

2 - 17

小笠原弾正組 三橋祐之助

御引渡

林 惣右衛門

右之通出席当分拝借地今日請取申候、 難有仕合奉存候、右御礼

参上仕候、已上 五月九日

覚

Ш 本寿 平

神谷兵太夫組

山本寿平

付、 右寿平儀本郷御弓町中村丈右衛門上ケ地当分之内拝借被 昨九日御普請方より引渡有之請取候段寿平相届申候、 依之 仰

申上候、以上

五月十日

神谷兵太夫

右御届書壱通御当番左京殿江差出ス

巳正月廿日本多弥八郎殿宗閑ヲ以五兵衛江御渡、 致し返上 翌廿一日下ケ札

御目付衆

鈴木相模守

衛中間 御中間 平 寿 平

上ケ地本郷御弓町中村丈右衛門

心小田切甚左衛門屋敷二被下候二付、 右寿平当分拝借地今度御裏御門切手番之頭杉浦五郎左衛門組同 近々地所相渡候間、

引払候様御申渡可有之候、尤引払相済次第御申聞有之候様存候

以上

巳正月

書面之趣山本寿平申渡候、 家作引払

之上猶又可申上候、以上

巳正月 鈴木千右衛門

対談之上借地住宅仕度段寿平願出申候、 弓町中村丈右衛門上ケ地、 以手紙啓上仕候、然者御組同心小田切甚左衛門致拝領候本郷御 違之儀も無御座候ハ、御普請方江及掛合願之通可申渡奉存候 候処、此度拝領人江引渡ニ相成候ニ付、家作引払候様申渡候処、 杉浦五郎左衛門様 私組御中間山本寿平奉願拝借仕罷在 甚左衛門よりも願出相 鈴木千右衛門

二月五日

此段御掛合申候、

以上

鈴木千右衛門様

杉浦五郎左衛門

御報

願書差出候儀見合候様申聞候、 普請かた江及内掛合候処、取調可申聞旨挨拶有之候、夫迄者右 成候旨被仰遣、 相違も無御座候ハ、御普請方江被及御掛合、右之通御申渡可被 之上借地住宅仕度段右寿平より願出、甚左衛門より茂同様願出 此度拝領人江引渡相成候間、家作引払候様申渡有之候処、対談 町中村丈右衛門上ケ地、 御手紙致拝見候、然者組同心小田切甚左衛門致拝領候本郷御弓 二御座候間、 右挨拶承之候上尚又及御答可申候、右御報如此御 右者御同様甚左衛門より拙者方江願出候間、 御中間山本寿平被相願拝借有之候処、 依之来ル十三日右挨拶有之候積 御

座候、 已上

二月九日

覚

上ケ地本郷御弓町中村丈右衛門

鈴木千右衛門組 御中間 平

地所引渡御座候様仕度、右之通御普請奉行江御達被成候様此段 甚左衛門儀も右寿平江貸置申度段願出申候、 引払可申処、是迄之通住居仕度段拝領人甚左衛門江掛合有之、 廿八日組同心与頭小田切甚左衛門江拝領被 右上ケ地拝領人有之候迄右寿平奉願拝借仕罷在候処、去十二月 依之寿平家作之儘 仰付候ニ付右寿平

御裏御門番之頭(切手脱)

申上候、

以上

杉浦五郎左衛門

巳二月十三日

候ニ付、 右之通願書差出候旨五郎左衛門より甚左衛門を以寿平迄挨拶有之 御普請方江掛合書差出ス

巳二月廿一日宗閑ヲ以差出ス、 宗二より差越、翌廿七日同人ヲ以与左衛門殿江返上 同三月廿六日左之通下ケ札いたし

覚

上ケ地本郷御弓町中村丈右衛門

鈴木千右衛門組

御中間 本寿平

右上ケ地拝領人御座候迄奉願拝借仕罷在候処、此度御裏門切手

寿平家作引払可申処、 番之頭杉浦五郎左衛門組同心小田切甚左衛門拝領仕候二付、右 只今迄之通住居仕度段甚左衛門江熟談仕

御掛合被下候様仕度奉存候、已上

候間、

右家作之儘引渡御座候様寿平相願申候、

此段御普請方江

御中問頭 鈴木千右衛門

右之通御中間頭申聞候間及御掛合候、已上

巳二月

大草主膳

御書面之趣致承知候、 配向差出、 山本寿平家作有之儘拝借地請取之拝 明後廿八日晴雨共四時支

罷出旨御申渡有之候樣存候、 以上 0

領人小田切甚左衛門江相渡申候間、

右場所江可

三月廿六日

鈴木相模守

例書

形术 田代織部 田代織部 超典 組伊賀者

天羽平太

下候様仕度奉存候、依之申上候、 御座候樣仕度旨平太相願候二付、 之通借地致し度段、七左衛門江熟談仕置候間、 払候様可仕候処、七左衛門拝領屋敷江家作仕候迄者先ツ只今迄 此度佐野豊前守殿与力増木七左衛門拝領仕候二付、家作早々引 右平太儀谷中三崎切手町安藤大助上ケ地拝借罷在候処、右屋敷 以上 此段御普請奉行衆江御掛合被 右家作之儘引渡

杉浦庄左衛門田 代 織 部

辰正月

覚

鈴木千右衛門組 山本寿平

御裏門切手番之頭杉浦五郎左衛門組同心小田切甚左衛門拝領仕 り候ニ付文政三辰年三月奉願拝借仕罷在候、 地住宅仕罷在候処、丈右衛門儀甲府勝手小普請被 右寿平儀本郷御弓町小普請秋月大学組中村丈右衛門拝領屋敷借 然ル処右屋敷此度 仰付屋敷上

門江引渡候旨立合組役人遠宮藤九郎相届申候、 依之申上候、 以

昨廿八日御普請方改役勤方舞木長三郎右拝領人甚左衛

上

巳三月

御中間頭 鈴木千右衛門

左之名面之者立合相済候事 右弐通三月廿九日御当番江差出ス、 尤廿八日引渡後立合藤九郎弁

御普請方改役勤方 舞木長三郎

同 同心

三橋祐之助平野定次郎

杉浦五郎左衛門組 御裏御門番

本郷御弓町

渡辺甚十郎

地割棟梁 網代五介

石河甲斐守

寛政十三酉正月廿四日

御目付衆

御目付中

覚

鈴木千右衛門組

山本寿平

小田切甚左衛門

地面甚左衛門引移候迄預置候様仕度旨同人相願候間、 領人出来候迄拝借住居仕罷在候山本寿平江三拾坪貸地二仕、 右甚左衛門此度拝領仕候書面之屋敷以前上ケ地ニ相成候節、 此段奉伺 残 拝

候、 以上

巳四月

右書面之趣山本寿平より茂申出相違無之候ハ、承

御裏御門番之頭

杉浦五郎左衛門

置可申渡与存候、依之御掛合申達候、

否御申聞可

有之候

四月

下ケ札

閑ヲ以返上

巳四月十八日五郎兵衛殿永筑ヲ以御渡、下ケ札致し翌十九日宗

間与頭山本寿平借地住宅仕度段、 書面御裏御門番同心与頭小田切甚左衛門拝領屋敷組御中 寿平より茂願出相違無

御 座候

下ケ札

四月

鈴木千右衛門

御普請奉行

鈴木 定

石河甲斐守

高田源十郎

又者拝領人江致相対候哉、 候二付近々屋敷相渡申候、 右両人拝借地青山権田原高井利右衛門上ケ地、 右之拝借地之内家作之儀者引払候哉 否御糺御申聞可被成候、已上 此度拝領人有之

酉正月

門江致相対候処、 書面之趣両人共相糺候処、 借地仕候積御座候家作其儘差置候旨申聞 拝領人御広敷伊賀者横田市右衛

下ケ札

依之申上候、 以上

酉正月廿四

小池定八竹内孫市

右御答下ケ札致し伊織殿江差出ス

御目付衆

御普請奉行

鈴木定吉

高田源十郎

付候二付、昨廿八日御普請方改役清水三郎右衛門引渡候旨立合 敷上り候ニ付、其節奉願拝借仕罷在候、然ル処右屋敷此度地主 宅仕罷在候処、 右両人武士地青山権田原元御小人高井利右衛門拝領屋敷借地住 利右衛門儀寛政九巳年十月御咎被 仰付拝領屋

酉正月

組役人白井藤五郎相届申候、

依之申上候、

以上

右弐通同月廿九日御月番左京殿江差出ス

御小人頭 前同人

「九拾三

九十八番可見合」

文政三辰六月朔日

三日返上いたし候 役入被仰渡候得者此方江引請宜敷と申筋ニも無之、 方ニ而難引請段口上ニ而相答書面相戻し候例も有之、勿論文化 樣、尤春松前奉行支配調役下役三橋勝十郎跡目願之儀二付奉願 談与ハ乍申答書を以御挨拶ハ難致段被仰達書面御戻し被成候 文・願等ニ付手数も相掛、他場所相勤罷在候者之儀何れニも内 万一異変等有之間も此方ニ而取扱不申候而者難相成、其上御証 越候様被仰渡候処、善左衛門義御中間を離、養子之儀者池田 忠兵衛殿栄筑ヲ以小林江御下ケ被成下ケ札答致し候積、 而御掛合ニ候得者御挨拶ニ者難及旨栄筑江申述、 者致方も無之、右之通ニ而相済候得共、 前広掛合等も無之、風意ニ御書付を以無役入被仰渡候儀ニ候得 尚又持格ニ而源右衛門手附可申渡旨御書付を以被仰渡候儀 手附当分出役相勤罷在養父跡目被 十四丑年十月御代官大岡源右衛門手附三郎次養子高木周蔵、 より内々掛合之節者渡切之御人故万事松前奉行方ニ而取扱、 請筋ニ無之、殊ニ在勤中之儀ニ候得者名代ニ而者猶又難引請 九郎手附見習相勤罷在候得者、 三郎儀者羽州在勤ニ而候得者難引請、 先者此度之掛合と同例ニ者候得共周蔵ハ江戸ニ罷在、 跡式被 仰付御支配無役二成、其上 夫共風意ニ御書付を以無 仰付候迚元場所江可引 此度之善左衛門養子善 右内談書同月 何れ書面 取調差 其上 此 右

古川山城守

羽州幸生村銅山詰御代官

善左衛門養子 羽州幸生村銅山詰 同人手附見習 佐藤善左衛門

佐藤善三郎

談候

七月

高·御足扶持被下候間其段茂可被申渡候、

右御留守居番同心明跡江可被申渡候、

をも為見習候様被 右善三郎儀去卯三月池田仙九郎手附見習被 仰付、 御手当金五両弐人扶持被下置候 仰付、 銅山方

付元場所御戻し之節、名代ニ而者相済申間敷哉、 者銅山方手足不申差支二相成候旨仙九郎申聞候間、 有之候処、右善三郎儀羽州幸生村二罷在、 戻之上、追而仙九郎手附銅山詰被 仰付候様仕度旨申上候積二 江戸表江呼出置候而 可相成儀二候 跡目被 仰

養子善三郎江跡式被下置候得者善左衛門元場所御中間江一旦御 右善左衛門儀病気差重跡目願差出此節取調中ニ有之候、然ル処

ハ、右之通取計申度、 辰六月 此段及御内談候

右佐藤善左衛門事元佐藤平八与申古沢組筋ニ而、 六月小宮山勤役中御代官手附被 仰付候事 文化十一戌年

「九拾四」

辰七月 日紀伊守殿被仰渡候段、 三右衛門殿立合八十郎殿被仰渡

御目付江

書面ヒレ付返上

御中間

御中間持格

「九拾五」 (朱書)

御目付衆

渡其外取計之儀、水野出羽守殿伺相済候趣左之通り 此度御金奉行之儀元方・払方一円ニ被 仰付候、 依之以来金銀納

諸向金銀納渡形・渡手形共御金奉行名宛之儀、元方・払方之無 差別一 同連名にて納渡致し候様、当時御金奉行名順左之通

内 膳 中山貞五郎 鈴木八兵衛 黒 沢正 助

西井孫太夫 西 新太郎 馬場藤五郎

金銀納渡定日之儀、是迄毎月十八日二者納渡共一同有之候処、 以来十八日者渡計致し、右納日之替日別段十四日ニ相立、 納日・渡日者是迄之通居置候積り、 則以来定日左之通 其余

毎月納日 十四日 廿六日

渡日 朔日 十日 十八日 廿四日

是迄庭帳と相唱候金銀納渡前日、 ニ相立、 取調候積り、 方・渡方等取調候処、以来御金奉行宅ニ而者取調不致於御金蔵ニ 右之内廿六日之納日ハ前々日廿四日渡日ニ付前日廿 但右定日之儀御金納日·渡日共前日· 月番御金奉行宅ニ而翌日之納 前々日両日 五.

服部与市

何れも勤候内並之通御足

尤御留守居番江可被

 \mathbb{H} 日ニ相定、 尤右庭帳定日刻限之儀者朝 四時より夕七時迄取

調候積、 則以来庭帳定日左之通

毎 月納 H 六日之庭帳四日・五日 十四日之庭帳十二日

十三日 廿六日之庭帳廿五日

九日之積り 渡日朔日之庭帳前月廿九日 十日之庭帳八日・九日 1 · 晦日 但 一小之月ハ廿 十八日之庭帳十六 八日 #

日 • 十七日 廿四日之庭帳廿二日・廿三日

有之、 依之此段及御達候 も御申渡、 より引続定日毎ニ於御金蔵取調候間、 右之仕法を以当九月十八日御金日より引続書面御金日毎ニ納 且庭帳之儀も右十八日庭帳日前々日十六日 已来金銀上納方・請取方等為御取計有之候樣存候 右之趣御心得御支配向 前日十七日 渡

辰九月十二日

「九拾六」

以書付奉願候覚

私共拝領屋敷裏間口年来雪霜ニ而氷崩落界締相分り兼居候、 之儀相互二半々之勘弁仕候様御差図被仰渡被下候、 間、 ケ土留仕竹木植置候ハ、、 之上界垣仕度此段奉願候、 住居柱際迄欠落候向も有之、実々難渋仕候間何卒崖下界締御改 、処当来打続雨天ニ付、一 右界締御改被下置候様奉願候、 往々格別之大崩茂有之間敷哉二奉存候 度二三四坪或者四五坪程茂崩落、 左候得者可成丈崩落候土崖岸江引上 尤御改之上ニ而足り・不足 右捨置候而 当時 然

> 被下置候へハ難有仕合奉存候、 ハ行々何 !程崩候も難計御座候間、 已上 乍恐此段奉願 候、 願之通御改

文政三辰年十一月

平井賛三郎 佐野弥平次 岩瀬左次兵衛内山重五郎 印印印印印

私共加判仕同様 奉

町 内世話役 高橋伊左衛門 印印印

願候、

以上

右之通相願候義実々難渋之趣相違無御座候間,

市川藤四郎平山仁兵衛

鈴木千右衛門殿 古沢茂右衛門殿

ここに挿入図あり

三御組大縄地絵図 面

(巻末参照

別紙 書 面 絵図 一面を以 願出候間御廻し申候、 思召可被仰聞 候、 以

上

+ 一月十七日

五 兵

衛

千右衛門様 茂右衛門様

二図御両所様御賢慮被仰聞、 尚御相談可申上候、 已上

こも相聞、 無之候間 御廻被成候書面 而尚御相談仕候方ニも可有御座哉ニ奉存候 御同様組役之者差遣し場所見分為致候上ニ 三組大縄屋敷之儀ニ而他向入交候場所ニも ·絵図面共一覧仕候処、 願之趣尤之筋

古 沢

趣至極尤 二相聞申候間、崖下三組之者江願出候趣申渡! 古沢より御下ケ札之通御同意奉存候、 願之

覧仕候、

是江者御同前より先方頭支配江申達候上ニ而見分差遣 且又元組筋之者ニ而も当時他向之もの有之趣ニ候間、

共何れ三組大縄之事ゆへ此方一手限見分ニ而可然奉存 方可有御座哉、 左ニも及申間敷哉、 屋敷之儀者上下

猶々御相談追々可申上候、 以上

+ 一月廿二日

鈴 木

午六月廿三日両組江左之地面崩跡見分書付、 組立合之上昨廿二日別紙坪不足凡書孫次郎差出、 次郎持参帰り差出し之、 御一覧之上筆頭之かたか年番の方か 丸山三組崩所三 尤於場所孫

何れニも此方江請取置可申ニ者不相見候ニ付廻状之節入遣ス、

留左之通

覚

裏行拾四間 間口八間

但(ママ) 三坪

古沢御組

但崩所拾五坪余

間口六間 裏行拾六間

永井松之助

裏行弐拾間

但崩所四間余

内山重五郎

裏行弐拾壱間余但崩所三間半余間口五間三尺余

岩瀬佐次兵衛

裏行弐拾間 但崩所三間余

佐野弥太郎

裏行弐拾間四兄 但崩所! 三間余

平井讃三郎

右之通ニ御座候、 以上

午六月廿二日

三御組

御組頭衆中

御賄役中

「九拾七の上」

巳八月廿四日駿河守殿被仰渡候段伝右衛門殿立合、 宇右衛門殿被

仰渡候

御目付江

右御台所番明跡江可被申渡候、

勤候内並之通御足高

· 御足扶持 左内

御中間

金子

被下候間、 其段被申渡候

八月廿四日

七十六与組合」

西丸野方御挑灯願

渡御座候様仕度、 用候様被仰渡候、 申度旨去春次兵衛殿勤役中相願候処、 御城内 御成之節御駕籠 依之御挑灯、蠟燭請取方之儀者当番所江被仰 此段奉願候、 御注進、御使之者、弓張御挑灯相用 已上 弓張者不相成箱御挑灯相

巳九月

書面 共請取相用御用相済候ハ、、 御城内 御成之度々当番所より箱御挑灯 其朝度々当番所江可相返ス ·御蠟燭

返上、 文化六巳年九月廿二日月番猪右衛門殿江当番粂右衛門より差出候 同廿五日左之通御附札を以猪右衛門殿より被仰渡候ニ付承付 其段御使組頭幷西丸御使江申渡

「九拾八

九拾三番可見合

文政四巳年正月元日加賀守殿御渡

御目付江

同人手附見習

佐藤善三郎

善左衛門養子

御代官池田仙九郎手附

尤御勘定奉行江可被談候、 右善三郎儀養父家督被下何茂支配無役二成候間可被得其意候, 右二付於当番所小沢伝之丞申渡 拙

者請取以文通真下平四郎江引渡、 尤当人罷出候

但為差添御代官仙九郎自身罷出候間別段差添人不罷出

同 一月十四日

御目付江

御目付支配無役 佐藤善三郎

配所銅山方手附可被申渡候、尤御勘定奉行江可被談候 右養父善左衛門家督被下候二付、 持格二而御代官池田仙九郎支

ス

右之趣世話役平四郎方江申遣明十五日

御城江差出候様申達

御 中間頭

佐藤善三郎御目付支配無役

候旨、 之口古沢申渡、 右持格二而、 河守殿御書付を以被仰渡候段、 御当番四郎兵衛殿江書面を以御届申上候段平四郎申聞 御代官池田仙九郎支配所銅山方手附可申渡旨、 御勘定組頭中川忠五郎江平四郎より引渡右相 無役世話役真下平四郎立合於中 駿 済

「九拾九」

文政四巳年二月廿六日摂津守殿御渡し四郎兵衛

此砌者御台所為給可申候 此節病人多二付御番衆其外ニ而も例と違詰切自分弁当之面々者

二月廿六日

御湯漬御断

大 7草主 膳

御持鎗之者 人

御長刀役之者 弐

御小道具之者 九 人

右者煩多二付居残相勤候間今廿六日御夜食被下候様御断被仰渡

御中間頭

可被下候、已上

二月廿六日

御小人頭 古沢茂右衛門

近藤鯉左衛門

右御当番主膳殿江差出ス、尤当分之内日々差出し候積り、 向方打

(朱書)

合置候

御中間押込伺

覚

鈴木千右衛門組

御中間

物儀押込置可申哉奉伺候、 以上 右彦惣実父表小間遣藤波万平小普請入押込被

仰付候二付、 関口彦惣

彦

 \bigcirc

巳五月廿八日

鈴木千右衛門

不及押込候

右之通御附札を以周防守殿被仰渡候段、与左衛門殿被申渡候ニ付 右御扣とも弐通巳五月廿八日御当番与右衛門殿江差出候処、後刻

彦惣江組頭孫次郎を以申渡ス

正少弼殿江差出候処、 請入押込被 半十郎組橋本佐次郎実方兄御作事方定普請同心野村喜三郎小普 仰付候二付、 兵部少輔殿書面御返しニ相成、不及伺ニ 押込伺文化六巳九月廿三日御当番弾

旨有之候

寛政六寅年二月八日

一、笠原五太夫組御小人目付山本清四郎儀、役儀不相応ニ付役儀取 右二付倅御小人山本伊之助幷四男他家江養子二遣置候同人組御 放御目付支配無役申渡押込候様御書付を以摂津守殿被仰渡候

遠慮可申渡旨摂津守殿被仰渡候

小人藤森金之助、押込伺一紙ニ認メ翌九日差出候処、

両人共番

但藤森金之助者二月廿六日御書付を以番遠慮 之助ハ三月十四日番遠慮 御免 御目見遠慮之格被仰渡候 御免、 山本伊

右者古例者為心得取調候二付留置

「百壱」

覚

御中間押込伺

御扣

羽

太左

京

小石川春日町 屋敷

鈴木千右衛門 塩沢彦右衛門 組

右彦右衛門拝領屋敷町人勘兵衛江貸置候処、 当時赤坂田町住居仕罷在候 隣地川船改役奥村

源太郎手附中村半兵衛拝領屋敷地借町人源助二御座候処、去月

十九日曉致出火、火元之儀不相決候二付筒井和泉守吟味之上両 借町人両人共押込申付候旨彦右衛門相届申候、 人之家作境目より及出火候ニ相決、 一昨九日和泉守於御役宅地 右二付類焼之者

も御座候間、 彦右衛門儀押込置可申哉奉伺候、已上

御中間頭

鈴木千右衛門

十月十一日

2 - 26

右御扣とも弐通

\bigcirc 出火遠慮可被申渡候

以内伺致し候処、 右衛門江申 右周防守殿被仰渡市右衛門殿立合左京殿被申渡、 渡、 同月十九日御免被仰渡無之二付 即日左之通御書付を以 同廿二日宗閑を 即日寿平を以彦

御目付江

御中間

塩沢彦右衛門

平を以申渡ス 右御書付周防守殿被仰渡候旨市左衛門立合主膳殿被申渡、 即 行寿

出火遠慮可被差免候

ケニ相成候処、 達有之、右者出火之節火元相決シ不申段、 右伺書昨十一日御当番源六郎殿江山崎氏相頼差出候処、 右之儀今朝様子如何と宗二江承り候処、 申聞候、 節御届先可差出処、 尤永筑明ケ番ニ付帰り候ニ付宗二江問合之事 今十二日右之趣被仰渡例鰭付返上致し候 延引之趣御口上相添御進達之積りニ 今日御当番より出火之 先御届無之由 則 二而 日御進 有之旨 御

得御 右之通遠慮被仰渡候得共其外何之御沙汰も無之候ニ付、 之 行吟味等二茂相成候節先御届可申上処、 右者昨日先御届可有之処之由ニ而相下り評儀之上、何れニも町奉 京殿江昨日之始末幷御上ニ相成候訳合以来之心得方等承り候処、 今日右之趣二御申上候処、 湢 不申上候旨御申取之趣 三相成、 其段御聞置被成候旨ニ而御附札を 遠山左衛門尉と御打合有 全ク双方共類焼而已相心 後刻左

> 候処、 申取二而相済候由二御座候 様相心得候之様被仰聞候、 以被仰渡候事、 何レ町奉行吟味等ニ茂相成候程之義と、 依之以来者先御届申上候心得二可仕哉之段相伺 尤此度不調法之義ハ被仰立無之只御 其節先御届

可 致

(朱一)の分見合物として留置」 (朱書) 右之趣此方・向方共順達致し候

殿被仰渡 違、 石川組山崎只三郎・柳田組池田佐太郎両人地境過チ火ニ而無相 文化十二亥年十二月七日出火居宅類焼、 尤類焼も有之候ニ付押込伺差出候処、 |郎左衛門殿被申渡、 翌晦日年礼ニも差懸り候ニ付 右御届同十二月廿九日 即日出火遠慮周防守

(朱引

免被仰渡

永田備後守吟味之上左之通相 極 ル

御小人類焼御届

覚

同所

本郷金助町

同所

右者昨 ·八日暁八時頃本郷金助町より出火ニ而類焼仕候、 依之申

御小人 中山金三郎組

御小人一個小人

柳田玖右衛門組

牧

助右衛門

御小人 八

Ŀ. 候、

亥十二月九日

中山金三郎 柳田玖右衛門

右御扣とも弐通、 名面書壱通添石川当番ニ而御部や三円を以差出

 $\overline{\bigcirc}$

御小人類焼之者名面

ス

本郷金助町

名前留略ス」

之義相願申候、 右者昨八日暁八時頃本郷金助町より出火ニ而居宅類焼仕候間休 依之申上候、 以上

亥九月九日

御小人頭

名

(朱引)

覚

本郷金助町

柳田玖右衛門組

西丸御小人

山本九太夫

右者一昨八日暁八時頃より本郷金助町より出火ニ而居宅類焼仕

御小人頭

名

候、

依之申上候、

以上

名面書文言前同断

亥十二月

御小人押込之儀奉伺候書付

覚

富永三郎右衛門

御小人柳田玖右衛門組

池田佐太郎

本郷金助町 **基調町屋鋪**

御小人 御小人 組

山崎只三郎

右者去ル六日暁八時頃出火仕候処場所相分り兼候ニ付、 永田備

後守及吟味候処双方通路口有之怪火之由、依之双方地境より出

付類焼之者も御座候間、 境出火ニ相違無御座候旨、佐太郎・只三郎より相届申候、 火有之哉之旨備後守尋有之、右者火之縁無之場所二付、怪火地 右両人押込置可申哉奉伺候、 以上

亥十二月廿九日

石柳

川田

殿被仰渡候段三郎右衛門殿被仰渡、 右御扣とも弐通御当番江差出候処、 即刻左之通御附札ヲ以周防守 当番中山承附返上

御附札

 \bigcirc 出火遠慮可被申渡候

御目付江

山崎只三郎御小人

年始ニも差掛り候ニ付、 出火遠慮可被差免候

右御書付を以亥十二月晦日周防守殿被仰渡、 合村上監物殿被申渡候 間宮猪左衛門殿立

役頭

旅行

旅行

料理茶屋 吉右衛門

長右衛門

万屋勘兵衛

組合 忠

兵

衛

家主

八

郎兵 名代江

川船改手附 中村半兵衛

(朱]

家主

三河屋源助

年寄同心 絵図方

火元 勘兵 吟味中預り 勘兵衛妻(ママ)

源 助

同

巳九月廿日

塩沢彦右衛門地面出火類焼之訳不相分、火元吟味町奉行所ニ而 此度も右例に任せ火元決着之上御届可致旨に相決取扱之事 伺出候得共、御内決二達置候儀無之与柳田玖右衛門申聞候二付· 同月廿九日両地主佐太郎・只三郎地境出火ニ相決、両人共押込 十二月八日出火二而其後双方吟味有之候、月末二相成裁断相済? 決着有之候上、御当番江口上ニ而内御聞ニ入可申哉、先年御小 人池田佐太郎·山崎只三郎火元吟味之節振合問合候処、其節

但地面計類焼之節者頭聞置候、 申哉、 八月 同席及評義候へ共、 日屋敷出火類焼有無届候様御書付出有之候二付届 是又任先例二頭聞置候方二評儀 御届進達不致事先例也、此度

いたし候

御小人出火火元之儀相決不申候二付御届

拝領屋敷湯島三組町

近藤鯉右衛門組 (左)

「百弐」

文政四巳年十月

御目付衆

奉存候、 作より茂願出相違も無御座候ハ、、追て御打合之上進達可仕与 共支配無役大島十蔵拝領屋敷江相対替仕度旨十蔵申出候、右金 御支配御中間頭鈴木千右衛門組御持鎗役鈴木金作拝領屋敷、 御進達日限之儀者御取極被仰聞候様仕度候、依之別紙 私

巳十月

表御台所頭

私共進達書案等相添及御掛合候、已上

下ケ札 金作拝領屋敷与相対替仕度段、右金作より茂願出相違無御座 書面表御台所頭支配無役大島十蔵拝領屋敷、 私組御中間鈴木

依之従是も願書写相添此段申上候、 御中間頭 鈴木千右衛門

巳十一月

2 - 29

住居

久松吉太郎

筒井和泉守殿組

巳十一月廿四日

儀未相聞不申候段右吉太郎相届申候、依之先御届申上候、以上

伊兵衛居吉五郎与申者居宅境目より出火之様子ニ而、火之元之 右一昨廿二日夜五時前、隣地面御目付支配無役渡辺甚太夫家主

近藤鯉左衛門

後刻書面之通二而進達相済候段同人申聞候事

右御扣とも弐通、御当番忠兵衛殿江宗閑ヲ以新例之旨口上添差出

表御台所頭

月番江差出ス より同人江返上致し候、 而永筑を以差越候間、 書写為見候上右之趣具二申談候処、 申聞候二付、 替相済候上ニ而一通り之相違無之旨下ケ札致し、返上有之候様 彼方進達書案計書損之旨二而引替候様取計可申旨申聞候、 之旨同十日宗閑江申述候処、 メ候儀二御座候、依之従是より右願進達書写相添、此段申上候 儀御持鎗之者ニ御座候得共、 付、 候様申候処、昨日掛合書与一処ニ可渡処由にて宗閑より差越候 翌八日山崎より祐守を以返上致、 右十一月七日御当番左京殿祐守を以吉次郎江御渡、下ケ札致し 猶又相糺候処七拾坪余二相違無御座旨申聞候、且又役名之 表御台所頭進達書案之内金作屋敷坪数七拾五坪と相認候ニ 即日御台所頭内山三右衛門江対面致し、此方進達 則此方より茂下ケ札致し、翌廿三日山 尤此方進達本書三通物も同人江差遣 定例之通惣役名を以御中間と相認 御台所頭江拙者より下掛合致し、 先進達書案写置候間御渡有之 同月廿二日引替相済候由二 右引 崎

日十二 月八日宗閑より山崎江相越

屋敷相対替奉願候書付表御台所頭支配無役大島十蔵

表御台所頭支配無役 大島十蔵

表御台所頭

七拾坪余 七拾坪余

右十蔵拝領屋敷祖父大島重蔵小間遣相勤候節類焼仕、 書物焼失

一付年号月日相知不申候

中間

右大島十蔵拝領屋敷四ツ谷内藤宿新屋敷

鈴木千右衛門組御中間

坪数七拾坪余

大島 十蔵江

坪数七拾坪余

右之通屋敷相対替仕度旨相願申候、 願之通被 仰付被下置候様奉

願 《候、已上

巳十一月

川村清兵衛石尾彦四郎

岩田吉左衛門

月廿二日御当番五郎兵衛殿永筑ヲ以被遣

+

拝領屋敷相対替之儀

申上候書付

月番 大草 酒井作左衛門 主

拝領屋敷相対替奉願候覚

一、七拾坪余 一、七拾坪余 四ツ谷内藤宿新屋敷

一、七拾坪余目白台水屋敷 右屋敷

御中間

鈴木千右衛門組

大 鈴 島 木 十金 蔵作 江

右金作屋敷何之頃拝領仕候哉年月等相知不申候、 尤是迄相対替

等不仕候

右之通被 右拝領屋敷書面之通相対替仕度旨金作奉願候二付申上 仰付被下置候樣仕度奉願候、

巳十一月

御中 一問頭

鈴木千右衛門

同年十二月廿八日願之通堀田摂津守殿被仰渡候段神尾市左衛門

右御扣共三通文政四巳年十一月廿三日月番大草主膳殿江差出候处,

表御台所頭支配無役

鈴木金作江大島十蔵

例書

大林粂右衛門組

加藤吉之助

、百坪余
「哲」

拝領屋敷小石川白山御殿跡右屋敷平五郎江

六拾五坪

御台様御広敷御下男

右屋敷加藤吉之助江

右之通屋敷相対替願、文化七午年七月晦日月番大河内善十郎

候旨御書付を以駿河守殿被仰渡候段、 榊原隼之助江差出候処、同年八月十六日願之通相対替被 安藤弾正少弼立合榊原生 仰付

之助申渡候、以上

巳十一月

御中問頭

鈴木千右衛門

右壱通

御目付江

鈴木金作拝領屋敷 七拾坪余

大島 十蔵江

大島十蔵拝領屋敷

七拾坪余

鈴木金

一作江

右願之通屋敷相対替被 仰付候、 御普請奉行江可被談候

右御書付摂津守殿御渡之旨市左衛門殿立合弥八郎殿被仰渡候事尤

文政四巳年十二月廿八日被仰渡之事

「 舌書) 三 百四

御中問頭 鈴木千右衛門 古沢茂右衛門

上

覚

御中間 粗

鵜 吉 善 蔵

父鉄五郎幷親類一 在江罷越度旨申候二付難相成段父鉄五郎申聞候処相用不申罷出 親類共打寄度々異見仕候得共一向相用不申、 相応ニ付御暇申渡父鉄五郎方ニ罷在候処、常々身持不宜候ニ付 右善蔵儀、元御中間相勤文政元寅年七月十九日勤向不宜場所不 右樣別而不行跡二相成末々難見届奉存候間、 同久離御帳面二附申度旨相願申候二付、 其上当月十五日近 此度右蔵蔵儀 巳弐十壱歳 差出

申候

文政四巳年八月廿四日

御中間頭 古沢茂右衛門 鈴木千右衛門

榊 主計頭様

右一 通上包美濃紙打掛ケ、 尤御頭御印形無之差出申候

奉願候覚

仕候得共相用不申、 御暇奉願候処被 私倅稲次郎儀当巳三拾弐歳ニ相成候、然ル処病気ニ付当月中面(マ▽ 同久離仕度奉存候、願之通被 仰付候、然ル処常々身持不宜候に付度々異見 末々難見届御座候二付、 仰付被下置候樣奉願候 此度追出シ親類共

鈴木千右衛門

榊 主計頭様

右本書程村半切ニ認、印形不致、上包美濃紙打掛ケニ而壱通月番

町奉行江差出候

記メ差越候 一位、月番町奉行より引替相渡候書面左之通、尤美濃紙竪紙ニ相 で御役宅江持参差出候処、同組与力秋山八左衛門より引替書面 相渡、非番町奉行江持参之旨申聞候ニ付右書面持参、筒井和泉 中間役宅江持参差出候処、留記候由ニ而同組与力蜂屋新右衛門 古月番奉行所より相渡候書面相帰し請取罷帰り候段相届候ニ 右月番奉行所より相渡候書面相帰し請取罷帰り候段相届候ニ おり、月番町奉行より引替書面 は、月番町奉行より引替相渡候書面左之通、尤美濃紙竪紙ニ相 で、月番町奉行より引替相渡候書面左之通、尤美濃紙竪紙ニ相 で、月番町奉行より引替相渡候書面左之通、尤美濃紙竪紙ニ相 は、見ている。 は、り、見ている。 は、り、見ている。 は、り、見ている。 は、り、見ている。 は、り、している。 は、り、している。 は、り、している。 は、り、している。 は、り、している。 は、り、している。 は、している。 は、して

目付衆へハ右ニ付御届ケ不致、頭印形も不致候事但同道人不差添組役人壱人当人壱人差出候事、尤先例之通御

文政四巳年十二月四日

鈴木千右衛門殿

被

仰付被下置候樣於私共奉願候、

以上

岩堀孫次郎

印印印

伊沢善之丞

文政四巳年十二月

御組山本寿平倅稲次郎儀二付相糺候処、

相違無御座候問願之通

候

御組山本寿平倅稲次郎儀二付奉願候通被

仰付被下置候樣奉願

類

松永小十郎

印

鈴木千右衛門

上

覚

鈴木千右衛門組

山本弱平倅

山本稲次郎

届奉存候ニ付、此度右稲次郎追出し父寿平幷親類共一同久離御異見仕候得共一向相用不申、近頃者別而不行跡ニ相成末々難見暇申渡父寿平方ニ罷在候処、常々身持不宜候間親類共打寄度々暇申渡父寿平方ニ罷在候処、常々身持不宜候間親類共打寄度々

御中間頭

帳面に付申度旨相願申候に付差出申候、

已上

文政四巳年十二月四日

下ケ札致し道寿を以返上日十二月十六日御部屋宗二を以御渡、古沢より相達候間翌十七日

長井五郎右衛門

山本稲次郎 山本稲次郎

頭山本寿平次男にて、拾壱ヶ年以前未年十二月中御小人押役江 右者組廻り之者身躰怪敷召捕候ニ付一通り相尋候処、 召出当時相勤罷在候由申立候、 右之通相違無之候哉及御掛 御中間組

巳十二月

合候

押被 主計頭御役宅江私書面を以組役人差添右寿平差出久 付、 二付父寿平幷親類共度々異見仕候得共相用不申候二 年十一月御暇相願候二付申渡候処、常々身持不宜候 組明キ御中間江被 而候処、兄病死ニ付惣領ニ相成、 書面山本稲次郎儀、 追出シ久離仕度段相願候間、 仰付罷在候処、 召抱、同十二亥年十二月御中間 私組御中間組頭山本寿平次男ニ 病気二付当巳年十月退役、 当月四日月番榊原 文化六巳年十一月 同

見合セ之例

離御帳面二附申候、

已上

御中間頭

鈴木千右衛門

巳十二月

美濃紙打掛ケ、 右程村半切ニ而上包 名字ニ而差出ス かた

上

御中間頭

大林粂右衛門

宝田富蔵

難見届奉存候間、 度々異見仕候得共一向相用不申、 暇申渡当時父富太郎方二罷在候処、 右富蔵儀元御中間相勤病気ニ付御暇奉願、 此度右富蔵追出シ弁諸親類共一同久離御帳面 近頃者別而不行跡ニ相成末々 常々身持不宜親類共打寄 文化十一戌年七月御

附申度旨相願申候問差出申候、已上

文化十一戌年九月

御中間頭 大林桑右衛門

永 備後守様

「百五」

御勘定奉行衆

時宜ニ寄於場所手附之者江も対談可致義も可有御座候間、手附 混雜可致与奉存候間、両三日中出役之者差立取調置申度存候間 役之者村方取調差出可申処 近々真間筋江 右大将様 御成御沙汰二付、在方人留為御用出 御成も近来無之、御場所之儀村方

右之通御中間頭・御小人頭申聞候間御達申候、 已上

二月

神尾市左衛門

又 兵 衛様

千 右 衛 門

昨日得貴意候在方之儀、尚又昨夜近藤氏拙者江被相越致評義候、

共先此段申上置候、 申達候様可仕候、 申上与近藤相廻り候得共出仕ニ而取込ニ付明日申上候様柿沼江 日出立為致候段中島氏より申上候得共右訳合ニ而延引致候段可 計可申奉存候、此段御承知可被下候、且又昨日市左衛門殿江今 ぎ候間、 手形等為持遺候歟可致哉奉存候、兎角差掛り候義も有之差また 且又松戸・市川等御関所通行之儀ニ付是又兼而通し方達置候而 可申、郡代等江も達等も申談、則別紙之通郡代ハ達書遣し申候 候節不宜候間出立之儀者延引ニ致し、今日在方一同評議致し置 何れ今日出立致し候而も先方ニ而達も不致置候而者差支等有之 此度 御成之在方之儀者私と鯉左衛門両人ニ而申合取 明日尚御心添可被下候、 已上 拝顔万々可申上候得

二月十一日

御紙面拝見仕候、 彼是御世話之儀

御世話之義難有奉存候

取置候事

奉存候、

何分宜奉願候

猶宜奉願

古 沢

Ш

崹

(朱書)

御中間御暇奉伺候書付

月番

酒井作右衛門

鈴木千右衛門組

御中間

御切米

忠見源八郎 巳四十弐歳

御抱入之者

一、拾五俵 壱人扶持 右源八郎儀勤方不宜、 一御座候二付、 組中風儀ニも拘り末々難見届者ニ御座候間 其上組頭共申渡候儀も等閑ニ仕不慎之者

> 暇差遣可申哉奉伺候、 以上

巳十一月

鈴木千右衛門

何之通御暇可被申渡候

孫次郎・賄役深谷市郎右衛門・加藤十三郎出席 殿立合市左衛門殿被仰渡、例之通鰭付返上致し、 二付名代同組小林新太郎幷組合小林平吉差添二而申渡、 七日御進達有之、翌廿八日御附札ヲ以近江守殿被仰渡候段源六郎 右御扣とも三通巳十一月廿五日月番作右衛門殿江差出候処、 即日源八郎病気 組頭岩堀 同廿

源八郎預り屋敷本所菊川町ニ候処、 組頭·賄役立合右名代新太郎江為申渡、 処、右是迄上納之残金弐拾両早々上納致し候上、 上且又去右屋敷江家作致し右書入籾蔵会所金弐拾五両拝借仕候 御暇被 新太郎・平吉より請書 仰付候ニ付屋敷差 家作取払候様

右源八郎家守平吉・五人組喜右衛門呼出し、同日源八郎御暇被 者より為申渡請書取置候事 等ハ少しも故障無之様家守・五人組引請相預り心付候様組役之 相済候迄源八郎之外誰成共申談候義有之候共、 掛り賄役加藤十三郎江申出差図を請取計可申、 仰付地面上り候ニ付、以後前書之趣申渡候ニ付異変其外地 家作者勿論屋敷 且又右上納其外 面

覚

大奥裏締戸番 鈴木千右衛門組 忠見源八郎

- 掛合方等等閑に仕、段々及延引組合共殊之外難渋仕候等滞候に付、毎度組合共取扱差置候得共、日限約定を違、其外の、常々強情之者に而種々無実之巧を仕、弁説を以金子等借請返済
- 一、智恩院方丈出立之節旅宿江見送りニ罷越候節等、房付候術手腰承り候。

座候

江挿居候由承り候

組之者所行ニ無御座、

紛敷致方仕候者二御

当正月妻離縁之後右妻之衣類等差留被遣幷妻之妹婿より借受候 右衛門儀源八郎対面差留候ハ、子細承り候上自分不存之義に候 も無之処、 衛門儀者源八郎江対面仕不申候段承り候、 内実者父二而御座候由、 出候樣鈴木千右衛門差図之旨松平越前守家来本多内蔵助留守居 家来小林六右衛門与申者を以右内済かた入用ニ付、 之金子等之義者組合共よりも世話仕漸調達仕候処、 金子返済不仕候二付願出候間、 一而 郎 相巧候儀与奉存候 如 六右衛門之偽謀ニ御座候ハ 元対面可仕処今以対面不仕旨扶右衛門申候上ハ全ク源 自分謀計取拵伯父を偽申候段不埒之儀ニ奉存候、 伯父忠見扶右衛門江為申談候二付扶右 組合共江申渡内済為仕候、 如何様ニも申開出来可仕等 右之通頭申付候儀 本多栄之永 金子拾両差 其節 扶

- 此度先妻かね義源八郎相手取所々及出訴候処、 而も此儘為相勤差置候而者奉恐入候儀と奉存候 候上者此後如何様之儀出来候節、 候、 衛門儀者実ハ父ニ而御座候処其後御中間青木吉次郎養子ニ相成 助家来相勤居候処身持不宜候ニ付暇出候者にて、伯父忠見扶右 其上等閑ニ仕置候故と奉存候、 候二付組役共申渡内済相整申候、乍然一旦源八郎不始末之致方、 候趣相認メ候得共、 右様暇出候もの又候取拵候而御家人ニ罷成候段入御内聞ニ 右吉次郎従弟二而御抱替二罷成候者二御 其上元松平越前守家来本多内蔵 先役共も不調 御取用ニ不相成 二御座候而於私 座
- 着若党幷草履取召連近所町人共方江風聴罷越候由御座候、大奥裏締戸番被 仰付候節奥御締番被 仰付候由申述、熨斗目
- 、平情分限不相応之美服等仕候
- 見届奉存候、以上事不取締ニ而組中風儀ニも拘り、末々何様之儀仕出し可申哉難事不取締ニ而組中風儀ニも拘り、末々何様之儀仕出し可申哉難、る通格外行事ヲ相好御家人ニ不似合紛敷所業仕虚事を設、家、御用挑灯所持仕居候由、右者御紋附ニ而も可有之哉ニ奉察候、

十一月

付候旨御附札を以紀伊守殿被仰渡候段源六郎殿被仰渡候文政四巳年三月廿日月番源六郎殿江差出候処、同廿一日御暇被仰

覚

t掃除之者御暇奉伺候書付

本多弥八郎

御掃除之者 村井太郎右衛門組

御切米

拾俵

小島仁三郎 巳四十壱歳

壱人半扶持

右仁三郎儀御奉公不勤其上組頭共申渡候儀相用不申者二御座候

一付、 御暇差遣可申哉奉伺候、已上

巳三月

村井太郎右衛門

「吾書)七」

為御褒美金三両被下置候旨内藤紀伊守殿被仰渡候段、 文政五午年正月十八日御月番与左衛門殿江差出候処、 御目付神尾 閏正月朔日

市左衛門殿立合本多弥八郎殿被仰渡候

覚

外拾弐俵半扶持御役米一、拾五俵

御切米

御中間組頭山崎又兵衛組

近田半左衛門

午八拾弐歳

無懈怠実躰二出情仕、数年達者二無滞相勤候者二付可相成御儀 召抱、天明二寅年二月養父家督被下置、 右半左衛門儀宝暦十三未年六月組御中間明キ跡江従部屋住被 当午年迄御奉公六拾年

者組之者一統励二茂相成難有仕合奉存候、 御座候ハ、、 何卒御称美被成下候様仕度奉願候、 此段奉伺御内意候 左様御座候得

以上

午正月

山崎又兵衛御中間頭

御目付江

近田半左衛門御中間組頭

右数年無懈怠相勤候二付為御褒美書面之通被下候間、 其段可被

申渡候、被下金者御納戸頭相談可被請取候

午閏正月

「百八」

文政五午年二月廿九日御扣共弐通与左衛門殿江口上添差出ス

御賄方江御断

仕度奉存候、 夕御台所頂戴致シ後レ候ニ付、 私共義西丸吹上江 御成御供之節又者御用二而西丸江相廻候節 此段御賄方江御断置被下候様仕度奉存候、 右之節々私共断次第引候而頂戴 以上

午二月

御小人頭 御駕籠之者頭

「 百 九」

文政五午年七月十日右書面小幡万兵衛より達候ニ付承付返却

江

御駕籠之者頭

願候者相糺候上是迄組入来候処差支之儀有之候間、已来者右之 行届兼候趣相聞候間、 御目見以下軽キ御家人家屋敷外異変有之候節壱人立候而者取計 無席少給之者ニ而も辻番組合ニ入度旨相

尤於躑躅之間跡目被

仰付候格合之

異変取扱方差支可申候二付組々支配之限、 兼而申合組合立置異

変取扱候様可申渡候

右之趣駿河守殿被仰渡候二付申渡候事

羽太左京

文政五午年九月六日西丸御当番四郎五郎殿江差出ス、同月十日押 込可申渡旨西丸水野壱岐守殿被仰渡候段、 桜井九右衛門殿立合柴

西丸勤御中間押込伺

覚

田三左衛門殿被仰渡候

阿倍四郎五郎

西丸御広敷御長屋御門番鈴木千右衛門組御中間

渡部新七郎

罷帰り候道筋再三相尋候へ共、 相加漸帰宅仕候処、御留守居衆焼印之御門札其砌取落候二付、 右新七郎儀当八月廿二日明番之節途中疝積差起所々休息仕養生 一向相知不申不調法至極奉恐入

午九月六日

御中間頭

候旨申聞候、依之新七郎儀押込置可申哉奉伺候、以上

鈴木千右衛門

御中間河原田忠次郎地面借地牛込原町弐拾人町古沢茂右衛門組 西丸御広敷御長屋御門番鈴木千右衛門組御中間

右新七郎儀当八月廿二日明番之節途中疝積差起所々休息仕養生

渡辺新七郎

住宅仕罷在候

被下候様仕度奉存候、 法至極奉恐入候旨届申聞候二付申上候, 相見え不申候ニ付、 早速親類幷仲ヶ間共相頼罷帰り候道筋所々再三相尋候得共一向 相加漸帰宅仕候処、 猶又心当り之処承糺候得共相知不申、 御留守居衆焼印之御門札其砌取落候二付 此段御留守居衆江御談 不調

九月六日

以上

御中間頭 鈴木千右衛門

右壱通西丸御当番四郎五郎殿江差出ス

覚

御中間河原田忠次郎地面借地牛込原町弐拾人町古沢茂右衛門組 住宅仕罷在候 鈴木千右衛門組御中間 西丸御広敷御長屋御門番 渡辺新七郎

候様仕度奉存候旨申上書壱通、右二付同人押込伺共西丸御当番 調法至極奉恐入候旨届申聞候二付、此段御留守居衆江御談被下 相見え不申候ニ付、 早速親類丼仲ヶ間共相頼罷帰り候道筋所々再三相尋候得共一向 差加漸帰宅仕候処、御留守居衆焼印之御門札其砌取落候二付、 右新七郎儀当八月廿二日明番之節途中疝積差発所々休息仕養牛 猶又心当り之処承り糺候得共相知不申、 不

阿倍四郎五郎殿江差出候間此段申上置候 以上

右壱通御本丸御当番甚四郎殿江差出ス

九月六日

御中間頭

鈴木千右衛門

覚

御掃除之者御門札被盗取候儀申上候書付

村井太郎右衛門組

下谷御掃除町拝領屋敷之内

住宅仕罷在候

関 五郎兵衛御掃除之者組頭

札都合弐枚当七月廿六日夜盗賊忍入、右御門札幷衣類九品被盗 右五郎兵衛江御渡有之候御留守居衆焼印之御門札幷私焼印之小

取候旨相届申候二付申上候、 此段御留守居衆江御談被下候様什

度奉存候、以上

八月二日

御掃除頭

村井太郎右衛門

御掃除之者組頭押込之儀奉伺候書付 服部久右衛門

覚

御掃除之者組頭 村井太郎右衛門組

関 五郎兵衛

守居衆焼印之御門札幷私焼印之小札都合弐枚被盗取候二付、 右五郎兵衛宅江当七月廿六日夜盗賊忍入衣類被盗取候節、 御留 五.

郎兵衛儀押込置可申哉奉伺候、 以上

辰八月二日

御掃除頭 村井太郎右衛門

同三日押込可申渡旨駿河守殿被仰渡候段伝右衛門殿立合中務殿

被仰渡候

九月三日押込被成 御免候旨駿河守殿御渡左衛門殿立合周防守

殿被仰渡候

右新七郎一件ニ付為見合留置候事

御目付江

西丸御広敷御長屋御門番御中間 渡辺新七郎

> 右之通壱岐守殿被仰渡候間可申渡候 御留守居焼印之御門札取落不調法之事二候、

> > 依之押込申付候

九月十日

文政五辰年十月十日三左衛門殿立合鹿之助殿被仰渡、 書面ヒレ付

返上

御目付江

西丸御広敷御長屋御門番 渡辺新七郎

御中間

右押込可差免旨内膳正殿被仰渡候間可申渡候

十月十日

「百拾壱」

文政五午十月四日

ニ 付、 御番所二丸・西丸共前書之趣藤四郎を以為申渡候事 用制方致候様主膳殿松田祐右衛門を以被申聞候旨友兵衛申出 御両卿方・式部卿殿雨天之砌通行之節、 向方ニ而者持場御番所向江廻状を以申渡候ニ付、 御番所向前々之通傘相 此方持

「百拾弐」

文政五午年閏正月十五日組頭藤九郎差出ス

奉願候覚

湯島天神三組町之儀、 烈与申ニも無之候得共物町不残類焼、 去巳十一月廿二日出火有之候処、 天神門前より池之端辺迄 敢而風 難義至極仕候二付、此度本文板屋二仕瓦置申度奉願候、 より出火類焼、 島天神門前町より出火類焼、 十丑年三月十六日町内より出火類焼、 相調候処明和九辰年二月廿九日目黒辺より出火ニ而類焼、 候趣旧記等も有之候ニ付、 春木町辺類焼之節、 間 共拝領町屋敷ニ而入用茅葺家ニ見競候得者多分相掛難儀仕候 同申合板屋仕瓦置申度奉存候、 之家二御座候故火消人足共消防差支候趣二御座候、 問所・聖堂抔江も風筋不宜候、 も及焼失候、 八未年十一月四日町内より出火類焼、 ?内より出火類焼仕五拾ヶ年之間七度程之類焼ニ而、 何卒瓦拝借金之儀奉願度奉存候、 既二東叡山江風筋悪敷或者北風二候得者昌平坂学 文化二丑年二月廿三日町内より出火類焼、 茅葺家之分瓦置二相成候節拝借金被 可然御沙汰奉願候、尤是迄類焼度数 寛政五丑年十月廿五日下谷茅町辺 然ル処一躰三組町之儀小給之者 一躰場末ニも有之前々より茅葺 文政四巳年十一月廿二日 天明六午年正月廿二日湯 右者享保十五戌年中本郷 依之此度一 以上 同 文化 安永 仰付 誠

文政五午年閏正月

町内世話役

小永井惣兵衛松永清四郎

印印印印印

鈴木千右衛門殿

和田斧三郎 真壁忠左衛門

佐々孫左衛門

一、金六拾両延享三寅渡

覚

但拾ヶ年賦

- 、金六拾九両 安永七戌

、金弐百四拾六両 寛政九巳年

壱人六両ツ、瓦葺水主同心四拾壱人分

茅場町山王御旅所別当幷 社家居宅類焼瓦葺 諸井宮 井図 書

右之外紅葉山勤之分御役屋敷瓦葺拝借之分多分有之候

万年橋

筒井権左衛門

右巳二月 日定蔵持参

座候而、 仕候、 座候、 度奉願候、 奉願候、 并万年橋御船蔵両所共風並悪敷御座候二付、 ル処当巳十一月廿二日神田辺より出火仕、 私御預り水主同心四拾三人之内弐人者深川御船蔵番為相勤、 者御船蔵際二住居仕罷在候間 右之通此度も拝借被 江防ニ相掛り候故組屋敷之儀防方相届兼、 右御船幷御船蔵之方出情為相防候間、 船蔵際ニ住居仕候、 正月類焼仕候節、 少給之者共甚難儀仕候間相応之拝借被 然ル処組之者家作之儀者茅屋根、 尤当組鈴木九太夫御預水主同心四拾八人、天明六午年 右四拾壱人之者御船蔵為相守同所組屋敷二罷在候、 以上 九太夫先役上村猪十郎奉願拝借被 残り四拾壱人者深川万年橋御船蔵壱戸前 仰付被下置候様奉願候、 瓦葺之積被 御船并御船蔵共別条無御 其上御船并御船蔵之方 組之者家作不残類焼 北風烈敷深川御船蔵 御船共水おろし仕 仰付被下置候様: 仰付被下置候様 躰組之者之儀 仰付候 然 御 御

巳十一月

備前守殿御附札

筒井権左衛門

勘定奉行可被談候 儀者来午年より卯年迄拾ヶ年賦上納之積可被申渡候、尤御願之通瓦葺之積を以壱人江金六両宛拝借被 仰付、返納之

瓦拝借之儀ニ付奉願候書付

奉願候覚

月番

与火之移り方も早く及大火候儀ニも御座候哉ニ奉存候、殊ニ茅葺而風烈ニも無御座候処、右住居向屋根一躰茅葺ニ御座候ニ付自然御目付支配無役之者九人、別紙名前之者共類焼仕候処、其砌敢屋敷住居仕候御中間三拾四人・御小人拾弐人・御駕籠之者七人・屋敷住居仕候御中間三拾四人・御小人拾弐人・御駕籠之者七人・

も御座候而者誠ニ奉恐入候義ニ付、此度家作之義茅葺相止板屋ニ座候、此以後万一出火御座候而風筋ニ寄上野幷学問所等江危キ儀座候、此以後万一出火御座候而風筋ニ寄上野幷学問所等江危キ儀之節者上野之方者風筋甚不宜御座候ニ付一同別而心配仕候義ニ御も相聞候、右場所者上野幷学問所等江者至而程近ニ而、既右出火も相聞候、右場所者上野幷学問所等江者至而程近ニ而、既右出火

屋根之儀者銘々防方も出来兼火消人足等も消防方行届

兼候哉二

余程相増、其上右場所者明和九辰年より去巳年迄五拾ヶ年程之届可申哉ニ奉存一同申合も仕候得共、茅葺ニ見競候得者入用も仕瓦差置候様仕度、左候得者飛火等之愁も薄く且者消防方も行

相

成

候

節

拝

;借金被

仰

:付候趣も旧記ニ相見え候ニ付、

此段厚

戌年本郷春木町辺御中間大縄屋敷類焼之砌、

茅葺家之方瓦葺二

之積二而相応之拝借被

仰付被下置候樣仕度奉存候、

仕候間、

何卒可相成義ニ御座候ハ、格別之思召を以、

享保十五

間二七度類焼仕候二付、

小給之者共故難及自力一同必至与難渋

持高拾五俵壱人扶持持高拾五俵壱人扶持

持高拾五俵壱人扶持

持高拾五

|俵壱人扶持

持高拾五俵壱人扶持

持高拾五

別紙

覚

持高拾五俵壱人扶持持高三拾俵壱人扶持持高三拾俵壱人扶持

古沢茂右衛門

組

御中間

小畔

小永井惣兵

真壁忠左衛門柴 沼 八 助

荒松杉川 梶荒下 山本谷清 佐 店 藤 市 市 小 本 赤 浦 村 吉 木 太 清 和 才 太 一 太 一 本 泰 次 武 武 郎 助 助 吉 郎 郎 郎 郎 郎 郎

御目付支配無役御間付支配無役世話役

持高弐拾五俵弐人扶持持高拾五俵壱人扶持持高拾五俵壱人扶持 持高弐拾俵弐人扶持持高弐拾表弐人扶持

持高弐拾俵弐人扶持

田久左衛門

持高治五俵壱人扶持持高治七俵壱人扶持 持高拾五俵壱人扶持 持高拾五俵壱人扶持 持高弐拾俵壱人扶持 持高拾五俵壱人扶持 持高弐拾俵壱人扶持

持高拾五俵壱人扶持 持高拾五俵壱人扶持

持高弐拾俵壱人扶持

御小人 御小人 門組

黑久石坪金加大塚 柳松吉謙 彦子五郎彦十三郎 郎郎蔵蔵吉市郎郎

柿沼吉次郎組 小人

栗島熊之丞 佐藤 九 蔵 金子惣四郎 尾崎善右衛門 布施平左衛門 中島長兵衛 誤籠之者

岩川江田小高和小石 堀村本野林橋田林原 孫市初村新藤小新四 右兵五新五左十太郎 衛衛郎平郎衛門

持高治五俵壱人扶持持高拾五俵壱人扶持持高拾五俵壱人扶持

持高拾五俵壱人扶持 持高拾壱石弐人扶持 持高拾五俵壱人扶持 持高拾五俵壱人扶持

宇佐美勇右衛門 安藤熊太郎

持高弐拾俵弐人扶持持高弐拾俵弐人扶持

右之通御座候、 持高拾五俵壱人扶持 持高三拾俵壱人扶持 持高拾七俵壱人扶持 持高拾五俵壱人扶持 以上

持高拾五俵壱人扶持 持高拾七表壱人扶持

渡辺甚太夫

持高弐拾俵壱人扶持

御目付支配無役

鈴 木 助 八 佐伊伝五郎

御中間筋無役

小沢次郎右衛門 小沢次郎右衛門 (ママ) 野村太兵衛 西村円左衛門 今井唯四郎

瓦拝借之儀二付奉願候書付 奉願候覚

月番

去巳十一月廿二日夜湯島天神前三組町より出火之節、

同所大縄

屋敷住居仕候西丸勤御中間四人.同御小人弐人.西丸御駕籠之

「此書前同文言ニ付略之」 (朱書) (朱書)

2 - 41

午 月

御駕籠之者頭

別紙

覚

持高拾五俵壱人扶持

持高拾六俵壱人扶持

持高拾六俵壱人扶持

持高拾五俵壱人扶持

右之通御座候、 持高弐拾俵弐人扶持 以上

月

右古沢方ニ而取調八月六日廻し来翌七日山崎又兵衛江順達いたし

候、 し来候得共同様之趣意ニ付書面者留略候事 尤御中間筋無役七人之もの共別段格通ニ願書差出、

「百拾三」

文政五午年六月十二日御当番市左衛門殿江御扣共弐通・例書壱通 相添差出、後刻周防守殿御附札を以不及押込旨被仰渡候段、作右

御小人頭

古沢茂右衛門組 西丸勤御中間

猪野権六田口武平

鈴木千右衛門組 西丸勤御中間 柴田重右衛門 和田斧三郎

西丸勤御小人 吉田紀太郎

近藤鯉左衛門組

柿沼吉次郎組 西丸勤御小人

鳥羽甚五郎

西丸御駕籠之者 鈴木新八

仰渡候、以上

押込伺文化元寅年七月廿日差出候処、

不及押込旨駿河守殿被

午六月

緒二廻

「百拾四」

御中間之内持高之外役米·役扶持·場所左之通御座候

役扶持壱人扶持

役扶持壱人扶持

百沢茂右衛門組 御中間組頭

御中間御供組頭

衛門殿立合市左衛門殿被申渡、 書面鰭附返上

御中間押込伺

神尾市左衛門

覚

鈴木千右衛門組 御中間

宇佐美勇右衛門

右勇右衛門倅同組御中間宇佐美雄作昨十一日御暇被仰渡候、 依

之父勇右衛門義押込置可申哉奉伺候、

以上

御中間頭

鈴木千右衛門

午六月十二日

御附札

不及押込候

例書

小林五兵衛組 御中間

右鉄五郎三男同組御中間鵜吉善蔵御暇被仰渡、 鵜吉鉄五郎 実父鉄五郎儀

| 「百拾五 | くえき |
|------|-----|
| 五. | |

不申立候事

| 場ニ而、役米扶持有之候分計向方申合認出頭手限申渡候、役米ハ | 右須田与左衛門殿好ニ付認差出ス、 | 午十二月 | 以上 | 役扶持半扶持 | 役米拾五俵 | 役扶持半扶持 | 役扶持半扶持 | 役扶持半扶持 | 役米拾五俵 | 役扶持半扶持 | 役扶持壱人扶持 | 役扶持半扶持 | 役米拾五俵 |
|-------------------------------|------------------|------|----|--------------------|-------|---------|-------------|-------------------|-------|---------|---|--------------------|-------|
| | 、尤若年寄衆伺済ニ而申渡候役 | 御中間頭 | | 御持鎗之者 西丸 御本丸 | 御籏指之者 | 御中間御供組頭 | 御中間組頭山崎又兵衛組 | 御 村 鑓 之者 | 御籏指之者 | 御中間御供組頭 | 御中間組頭鈴木千右衛門組 | 御持鎗之者 西丸 御本丸 | 御籏指之者 |

下殿被申渡 日御中間組江御返被下候旨出羽守殿被仰渡候段、善十郎殿立合丹 願候、以上 間大縄町屋敷差上候ニ付、 右宇平太義箱館奉行支配調役被 坪数六拾八坪三合七勺本郷菊坂台町 午二月 御中間大縄屋敷取戻之儀奉願候書付 覚 先格之通御中間組江御返被下候様奉 仰付、是迄拝領仕罷在候御中 箱館奉行支配(松前) 月番 御中間頭 小島由右衛門 深山宇平太 彦坂三太夫 大河内善十郎

文政五午年二月九日善十郎殿江御扣共三通差出ス、同壬二月廿一

大拾八坪三合七勺 七拾八坪三合七勺 内拾坪崩落 奥行拾六間三尺 夷間口三間三尺

町奉行衆

午二月廿六日善十郎殿江口上添差出ス

覚

深山宇平太

右上り屋敷御中間組江願之通御返被下候旨去廿一日出羽守殿被

上り地面 深山宇平太

仰渡候間、 町奉行衆より引渡有之候様御達可被下候

午二月廿六日

御中間頭 鈴木半十郎

右之通御中間頭申聞候間御達申候 以上

一月廿六日

大河内善十郎

彦坂三太夫

引渡可申旨申聞候義之処、 右ハ先例元組江御返被下候旨之被仰渡有之候翌日頃、町奉行より 此度ハいまた達無之ニ付此方より右シ

通懸合差遣候事

御目付衆

六拾八坪三合七勺
御中間大縄町屋敷丸山菊坂台町

深山宇平太

渡可申候、請取人・立合之者明廿八日朝四時晴雨共右場所江御 右拝領屋敷御中間大縄町屋敷二付、 御中間組江御返被下候間相

差出可被成候

二月廿七日

根岸肥前守

引渡罷出候もの

根岸肥前守組与力 徳岡栄次郎 同組年寄同心 渡辺小右衛門

東条小丹二小田切土佐守組与力

注 善 善 主 善 素 同 組 年 寄 同 心

地割役

樽屋三右衛門

町年寄手代 太田善蔵

一 今井由五郎 町年寄手代 地割手代

川上武兵衛

右之もの共立合、此方より組頭竹中太郎吉・賄役松坂藤次郎立

地所受取候事

午二月廿九日御当番久右衛門殿江差出ス

覚

本郷丸山菊坂台町御中間大縄屋敷

六拾八坪三合七勺

箱館奉行支配調役 深山宇平太

次郎・東条小丹二両人罷越地面引渡候ニ付、 右上り屋敷御中間組江御返被下候間、 昨廿八日町方与力徳岡栄 組役之者差出受取

申 候、 依之申上候、 以上

午二月廿九日

御中間頭 鈴木半十郎

「百拾六」

文政六未年四月廿日右伺書御供組頭仁兵衛を以西丸掛り江差出候 処、御附札之通被仰渡候旨近藤新吉申聞候段、 仁兵衛申聞候間右

之趣御供組頭定蔵江申談

明廿一日 内府様於駒場野追鳥狩之節、 御簱指之者勤方之儀伺

候趣左ニ申上候

御目付衆より御簱指之者五人御鳥見方江引渡有之候後、駒場大 御扣御纏左右ニ相分り御取見方差図ニ而 松之下二相待罷在御扣御鳥見方より請取申候、 御立場江罷越、 御場相初り候刻 御

但前々より駒場野 御成御麾御用其外 御前近ク相勤候砌者、

招立御簱指之者 御立場之下二罷在候

脇差計にて為相勤申候、此度も右之趣ニ相心得罷在候

御場相済最初之通御招ヲ持大松之辺ニ開キ、 御用相済御招御鳥

見方江相渡可申哉

御招之儀五人内代りく~持候心得ニ而罷在、風烈之節者惣掛り

仕可申哉

右者駒場野追鳥狩之節、 相勤候振合之趣御簱指之者申聞候、 此度

も書面之通為相心得候様可仕候哉奉伺候、 以上候

未四月

御中間頭

古沢茂右衛門

山崎又兵衛 鈴木宇右衛門

図次第可相勤候、尤御鳥見諸事差引致し候規定ニ有之候 御当朝於揃所御鳥見方江御簱指之者引渡候後者奧向之差

「百拾七」

文政六未年三月十九日右壱通御月番弥八郎殿江差出ス、後刻願之

通御聞置之旨御部屋祐守ヲ以被仰聞候

覚

鈴木宇右衛門組

御中間

島 留 吉

右者病気二付奥州岩城湯本江湯治仕度旨相願申候間申上候、 以

上

未三月

覚

御中間頭 鈴木宇右衛門

鈴木宇右衛門組

平島 留 吉

> 右者奥州岩城湯本江為湯治、 今朝六時千住宿通出立仕候旨相届

申候、 依之申上候、以上

未三月廿七日

御中問頭 鈴木宇右衛門

右壱通御当番三左衛門江出ス

覚

鈴木宇右衛門組 御中間 平 島 留

吉

右者奧州岩城湯本江為湯治先達而罷越候処、 昨廿九日帰府仕候

旨相届申候、依之申上候、以上

未五月朔日

御中間頭 鈴木宇右衛門

右壱通御当番弥八郎殿江差出ス

「百拾八」

文政六未年四月右御扣共弐通左京殿江差出し候処、御勘定奉行江

御掛合

羽 太左 京殿

村垣淡路守

御駕籠之者頭 金子五郎吉

同人倅

金子祷蔵 未弐歳

不申候二付御暇被下、 右五郎吉妻儀当二月御乳持為御用被 倅為養育来ル酉年十二月迄御扶持方三人 召抱候処、乳上り御用立

扶持被下置候旨被仰渡候、右請取方之儀私共御切米御扶持方直

判手形を以請取候儀ニ御座候間、 前書同樣直判二而請取候樣仕

度類例も無御座候間此段奉伺候、 已上

御駕籠之者頭

平島 庄 助杉山八之助

右之通五月廿一日御下ケヒレ付返上

書面養育御扶持方請取手形之儀者金子五郎吉裏判

貴様方御壱人裏判ニ而有之候

村垣淡路守

書面伺之趣下ケ札之通相心得可申旨奉承知候 御駕籠之者頭

五月廿六日

金子五郎吉

「百拾九」

文政六未年五月廿八日西丸御月番小兵衛殿江差出ス

覚

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付 三浦七蔵

右者病気に付但州木之崎江湯治仕度旨相願申候間申上候、已上

鈴木宇右衛門

右壱通西丸御当番帯刀殿江差出候

未五月

覚

鈴木宇右衛門組 三浦七蔵

右者但州木之崎江為湯治今朝六時品川宿通出立仕候旨相届申

候、依之申上候、已上

六月二日

御中間頭 鈴木宇右衛門

右壱通西丸御当番小兵衛殿江御部屋清哲を以差出ス

覚

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付

三浦七蔵

右者但州木之崎江為湯治先達而罷越候処、 昨廿七日帰府仕候旨

相届申候、依之申上候、以上

未八月廿八日

御中間頭

鈴木宇右衛門

「百世」

文政六未年十月十二日甚四郎殿御達之旨篠原左右衛門相達ス、五(佐)

役承付御徒押江相廻ス

一、近来諸向より差扣伺等多ク差出候儀、以来者寛政三亥年御書付 を以被仰渡候通相心得、 一類共より伺差出候様和泉守殿御口達

こ而被仰渡候事

十月

「百廿壱」

文政六未年八月右書面御扣共三通・例書壱通

覚

拝領大縄町屋鋪本所中之郷新町

坪数八拾九坪余

文政七申年七月十日玄蕃頭殿御渡御口達伊賀守殿御達

恩田 半助

相願候様可致事

但父之代ニ新規相済、

其後代替歟又者一旦小普請入再勤致し

候者新規屋敷願可差出候事

し候共、以来其都度々々継願致し候ニ不及、勝手次第場所見立 新規屋敷願差出所者見立相願候様達シ相済候後、其身転役等致

敷差上候二付、 右半助儀御普請役被 先格之通御中間組江御返被下候様奉願候、 仰付、 是这拝領仕罷在候御中間大縄町屋 . 以 上

御中間頭

名

例書

未八月

拝領町屋敷本郷菊坂台町

坪数六拾八坪金

松前奉行支配調役

深谷字平太

戻願御月番大河内善十郎殿江差出候処、 右宇平太屋敷差上候ニ付、文化七申年二月九日御中間方より取(宇) 同月廿一日御返被下候

旨出羽守殿被仰渡候段、善十郎殿立合丹下殿被仰渡候

未八月

御中間頭

(朱書) 「百廿弐」

押江相廻ス 文政七申年二月駿河守殿御渡右書面蒔田又三郎相達四役承付御徒

諸向御供之面々羽織之儀、大島或者大形之類着用致し候而茂不

苦候、尤ちらし模様・染分等之若輩ヶ間敷羽織無用ニ候、 此段

為心得申達候

二月

「百廿三

百廿四」

「石廿五」 「五十五」

(朱で抹消)

百廿四 文政七申年八月右冬御切米取越御添状差出サス此手形ニ而請取候

請取申冬御切米之事

事

米合拾八俵者

被差遣候二付、 右是者御中間拾五俵宛取武人、 御勘定所御添状之通、 日光山珠御道中筋御見分為御用 当冬御切米只今取越被下

候間、当申冬為御切米石式人分請取邦処実正也、 仍而如件

御中間頭

古沢茂右衛門山崎又兵衛

文政七申年八月

野呂弥右衛門殿安井平十郎殿

文政七申年九月

` 御中間・御小人平役之内より席持之場所江転候もの無之哉之旨 候様被仰聞候に付、平役より席持に相成候例近来無之与覚候得 甚四郎殿御尋有之候二付、先無之旨申上候処、 向方打合有無共甚四郎殿江申上ル 尚取調早々申聞

正徳五未年正月十五日御駕籠頭被 仰付候 浅 井 平

t

御小人

仰付候 鈴木八兵衛

仰付候 御小人 Ш 本作左衛門

享保六丑年五月十五日進物取次上番被

享保元申年十月御中間頭被

右之外御中間・御小人より席以上被 仰付候者無御座候、 以上

申九月

「百廿六」

文政七申年十月当番所伝左衛門より達、 五役承付相返ス

黒鍬之者頭火之番組頭

江

御駕籠頭 御中問頭 江 河 和 小 人 頭 江 大 頭

屋敷相対替以来左之通

当人之高

切坪相対替仕候而屋敷ヶ所有之候ハ、、 可申候 其ヶ所・坪数共相認メ

> _ 屋敷拝領相対替年月日、 対替不仕旨相認メ可申候 何年何月幾日誰と相対替仕候、 其後相

切坪相対替二先方屋敷計切坪之節者此方より絵図面差遣ニ不及

候

右之通相心得願書差出可申旨玄蕃頭殿被仰渡候 十月

小田切土佐守

「百廿七」

御中間類焼御届

酒井作右衛門

覚

鈴木宇右衛門組 御中間

人

右者一昨廿九日夜九ツ時頃駒込追分町より出火ニ而居宅類焼仕

候ニ付御届申上候、 以上

申十月朔日

御中間頭

山崎又兵衛
古沢茂右衛門

文政七申年十月朔日右御届書壱通御当番江差出ス、 後刻休之儀定

ニ而差出候事

但組方之者計二付例此方一名二而差出シ可申処、

慎中ニ付両名

例之通作右衛門殿被仰渡候

御中間類焼之者名面

覚

酒井作右衛門

鈴木宇右衛門組 御中間

駒込追分町

石原安次郎 川野長兵衛

右者一 一付休之儀申上候、 昨廿九日夜九時頃駒込追分町より出 以上

火二而居宅類焼仕候

御中問頭 山崎又兵衛門古沢茂右衛門

申十月朔日

「百廿八」

文政八酉年御徒押より廻し来、 五役承付当番所江返却

之候共、見分不相済死骸引渡候得者、 たし候節、 武家ニ而在方之者を請人ニ取召抱置候奉公人、於屋敷内自殺い 他之引合等無之全乱心自殺ニ而主人心障り之儀も無 於在方者檢使等二差支候

趣二相聞候間、 以来在方請奉公人自殺之節者全乱心ニ而他之引

方支配向之者差遣可申候間、 合弁主人心障り之儀無之趣届書面ニ候共、 見届相済候上ニ而請人・人主之内 其向江為見届御目付

相心得可申候

江死骸引渡候様可致候、

尤町方請二而召抱候奉公人者是迄之诵

右之趣為心得向々江無急度可申達置旨右京大夫殿被仰渡候ニ付申

達候事

「百廿九」

文政八酉年正月十二日御当番土佐守殿江上ル、 札を以不及押込旨被仰渡候段伴次郎より相達ス、尤当人共江も同 後刻周防守殿御附

右者

政之助殿近

Þ

御本丸江為

御逗留被為

候節御

供

人より相達

島 田 与 市 山本猪三郎

節 右者一昨十日上野 中山備前守 水戸殿為名代二天門内江入候二付 御名代大久保加賀守殿御勤被成、 御名代不相 御退散之

之猪三郎 · 与市押込之義奉伺候、 以上

院由申達候得共、

押而差留不申候段不調法至極奉恐入候、

依

正月十二日

三浦伴次郎

拾の上

文政八酉年正月御達書折本とも西丸堀越又右衛門より廻しニ付 両

役承付返却

西丸御駕籠者頭御小人頭 西丸御徒目付組頭 頭

御御御御御御御御 雨挟傘内持草人 覆箱持手鑓役取目付 り 付

為御知御使之者

御駕籠之者

壱拾四弐四弐壱弐壱三弐 人人人人人人人人人人人

2 - 49

立別紙折本之通、且書面之人数御雇二而差出可申旨壱岐守殿江

伺相済候間、 此段申渡候事

正月

「別紙折本」

細田小兵衛

添番

御

小納戸

八弐人

御医師

御小人目付 御小人目付 御徒目付

同

御駕籠

御草履取

御小納戸三人 御広敷御用人壱人

同同

御槍立不申 御傘

挟箱

御数寄屋坊主

御槍 御雨覆

御茶弁当

御徒目付

御小人目付

御傘 挟箱

但西丸より被為 入候節、 御挟箱御跡附御裏御門

は挟箱共蓮池御門通り御広敷江相廻申候

下より御先江立、

桔橋外ニ而開キ申候而御鎗

「百三十の下」

文政八酉年四月細田小兵衛殿堀越又右衛門を以御達即刻承付返上

近々 若君様 御本丸江被為 入御逗留被遊候節御道筋西丸

御広敷より御裏御門・西桔橋より被為 入候、 御広敷御供建

開別紙絵図面之通可心得候、西桔橋外御供建・開之儀者

内府様 御成之節之通り可心得候

_ 御供方着服、 服紗給麻上下着用之事

西桔橋江被為 入候与表向御供者御目付引纏西丸江引候事

_ 御逗留中者 御召御駕籠・御鎗・御長刀・御傘者 御本丸御玄

関江差置候事

御行列御跡より女中相越、 若御途中おゐて御乳御用之節者表方

御供片寄致平伏御用相済御供建候事

御供泊りハ不致、 火事·急事之節者御供人数 御本丸江駆附候

事

_

右之通可心得候事

四月

細田小兵衛

ここに挿入図あり

西丸御広敷御供建場絵図若君様 御本丸江被為 2図(右・左) 入候節

卷末参照

(右・左)

還御之節二図(右・右

西丸御広敷御供開場絵図

(巻末参照)

一年 (朱書) 二拾壱」

文政八酉年四月

日懸りより差越承付返却

御小人頭御中間頭江

奥表仕切戸番人御台所前仕切戸番人御村所前仕切戸番人御長屋御門番人

附不申西之方江片寄罷通候樣制之、 右者来ル廿九日より五月六日迄御處中往来幷供之者等御處之方江 尤御屍建候節往来立留り候義

抔無之、 別而制候様御門々々番人江可申渡候事

右御門々々御處中致不寐夜中御場所相廻り候様可致候、 屋御門・ 奥表仕切戸番人者増人致し都合三人宛ニ而相勤候様可 尤御長

致候、 且表向仕切戸御番所掛り御小人目付弐人ツ、泊り候事

御熀建・ 所持場切二而右御挑灯可致世話候、 御道具建候御場所江夜中大丸御挑灯相建候二付、 尤火鎮し候節者表火之番立 御番

右番 人五 月 朔 日 ・五 日 · 六日麻上下着用候様可申渡候事

合候事

御縨御用 ニ付来ル廿九日丼五月六日右両日御使之者拾人ツ、可

差出候事

竹川善兵衛 一色外記

右之通可申渡候、 尤諸事前々御屍建候節之通り可相心得候事

四月

「百三拾弐」

文政八酉年八月 日遠江守殿御渡、 土佐守殿御達

橋 二位殿

准大臣 宣下ニ付 向後 橋儀同殿与称可申候事

右之通向々江可被達候

酉八月

右同断

公方様 橋一位殿准大臣 内府様江御祝儀として明後九日 宣下に付、万石以上之面 御本丸・西丸月番之

老中宅江使者可被差越候

但病気・幼少・隠居之面々も右之通たるへく候

高家・雁之間詰・御奏者番・諸番頭・諸物頭・布衣以上之御役 人者明後九日染帷子麻上下着用 御本丸・西丸江可有登

越候

在国・

在邑之面々者老中若狭守・能登守・駿河守江飛札可被差

右之通可被相触

候

八月七日

酉八月五日左京殿被遣承付返上

御徒目付組頭江

御 小人目付 弐

渡 右者 被仰渡候二付縊股立二而差出、 候、 一橋一位殿昇進以後 尤被出候都度々々前日 御城内外共被出候節々為制差出候様 一橋用人より当番迄申越候筈ニ候 野服之節者野服相用候様可被申

事

八月

羽 太 左 京

七月廿日於新番所溜御月番摂津守殿御引ニ而周防守殿御直ニ御 之、行掛り差扣させ可申候、 家老可被申談候事 相心得、 橋 位殿昇進以後 制方之ため御小人目付両人ツ、出役為致可被申候、 御城内外往来制方之儀、 大躰 姫君様方御通行之程合ニ而 人留与申ニ者無 渡 尤

七月廿二日一橋家老江懸合、八月三日下ケ札ニ而挨拶来ル

別紙御書取周防守殿御渡被成候二付写御達申候

之候、右御達を以出役之儀申渡候様可致存候御昇進以後御登が城其外御出之節共前日当番同役共江御達可有の、御書取之通制方之ため御小人目付両人ツ、出役為致候に付而者、

御昇進以後御出之節、 早々御申越可有之候、 申 進退有之候御心得二候哉、 路等も無之場所ニ而無拠御行逢ニ相成候節者御会釈向等如何御 様申達、 出役之御小人目付随分御先江為立、 -渡候義二付右之趣及御懸合候、 可成丈者御行逢二不相成様為致候方可然存候得共、 以上 若御途中二而万石以上以下共罷越候節者 御小人目付出役も被仰渡制方心得も 尤伺候義も可有之候に付否 声為掛、 横小路等江罷越候 小

羽太左京

七月

成候田橋当番用人共より前日御達可申候間、左様御心得可被田橋当番用人共より前日御達可申候間、左様御心得可被御書面之趣致承知候、昇進以後被出候節者其都度々々神

之候ハ、早速後上之御達可申候何いたし置候品も御座候ニ付、若振合も相替り候義も有何いたし置候品も御座候ニ付、若振合も相替り候義も有扣を以先是迄之通相心得罷在候、尤此間及御挨拶候通内御書面御掛合之趣致承知候、別紙書抜文政三辰年伺済之

「別紙書抜」 (朱書)

書抜

文政三辰八月十六日

途中万石以上江出会被致候節、下乗無之駕籠居置会釈被致候、一橋一位殿老年ニも被相成立居不自由ニ被在之候ニ付、以後於

一橋一位殿昇進以後 御城内外御出之節為制御小人目付両人尤其節使を以断被申達候、右者伺之上ニ而右之通相成候

様ニ而も不可然奉存候間、縊股立仕候様申渡候間、依之此段申ツ、出役為仕可申旨被仰渡候ニ付、右罷出候節屋形小人目付同

上置候、以上

八月

羽太左

京

八月九日別紙御小人目付世話役より差出候書付相添左京殿江上ル

即日伺之通可申渡旨被申渡書面御下ケニ付承付返上

八月九日 小野伝左衛門通可申渡旨被仰渡承知仕候 書面別紙出役御小人目付心得方伺之

御別紙御承附之通出役御小人目付相

心得可申旨被仰渡奉畏候

八月九日 御小人目付世話役

一橋儀同殿 御城内外御出之節

出役之御小人目付心得方之儀二付奉伺候書付

橋儀同殿 御城内外御出之節出役御小人目付心得方之儀、別

紙壱通奉入御覧候、以上不相当之儀も無之、依而伺之通可申渡哉与奉存候、則差出候別紙之通御小人目付世話役よりヶ条書を以申聞候間得与相調候処

八月

高倉助五郎 三浦伴次郎 門

橋一位殿御昇進以後 御城内外御出之節

出役心得方之儀奉窺候

番所江申込、扣罷在候心得ニ御座候一、御城内外御出之節、御供廻り刻限より半時早ニ神田橋御屋敷当

一、御出之節者御供立を相離、壱弐町程御先江操越制方仕候心得ニ

御座候

罷出相制候心得ニ御座候一、御出之節玄関前江扣罷在、御駕籠ニ被為召候御程合ニ而御先江

一、御帰殿之節者御門外ニ而御供立を相離、平伏仕候心得ニ御座候

キ荷物等車同様ニ相心得可申候等差掛り外江引入候場所無之節者車片寄置候心得ニ御座候、重扣させ、横小路等有之候場所者可相成丈横小路江払入候積、車武家屋敷者辻番人、町方者町役人江制方申渡、往来之者行掛り

着座之儘差置候心得ニ御座候、町々見世先ニ罷在候見えかゝり男之分土間江おろし、女之儀者

より顔出し不申候様制候心得ニ御座候一、武家方屋敷長屋窓之内ニ而着座いたし罷在候者者其儘差置、窓

、御途中ニ而万一御三家方・御三卿方御出逢之節者、御三家方・御

駕籠程近ニ而平伏仕、相通候様仕度兼而御家老御城附江御達御候而者制方差支ニも可相成義も可有之候間、御先之者江相断御三卿方御先之者江申達、御先挟箱ニ而平伏可仕処、平伏仕罷在

座候様仕度奉存候

人・町役人共江申渡候様可仕候番屋等有之候場所之義者、見え渡候分可成丈制方致し候様辻番其外 姫君様御通行之御振合ニ相心得、横小路辻番所又者町其外 姫君様御通行之御振合ニ相心得、横小路辻番所又者町

者辻番、町方者町番屋江預ケ置御帰殿之上御当番江申上、御差御途中万一不法之者有之制不相用候者有之候節者、其所武家方

図請候心得二御座候

得ニ御座候者、心得方承候上ニ而頭支配名前承り、翌日御当番江申上候心者、心得方承候上ニ而頭支配名前承り、翌日御当番江申上候心、御目見以上幷御家人ニ至迄、万一心得違之者有之制相用不申候

ニ而平伏仕往返仕候心得ニ御座候一、制方之儀ニ付候而御館向之者江懸合候義有之候節ハ、御駕籠脇

段申達候心得ニ御座候ニ而御出合申度由強而申候ハ、、姓名承御館向之者江従私共其ニ而御出合申度由強而申候ハ、、姓名承御館向之者江従私共其達可成丈御出逢者無之様可仕心得ニ罷在候得共、万一先方存寄一、諸侯方都而御役人方ニ於途中ニ御行逢之節ハ、駕籠脇之者江申

行衆江御達御座候様仕度奉存候一、御通行之節町役人共江申渡候義有之節、差支等無之様兼而町

奉

於御途中万一出火等有之節者御程合を見合、 行懸り差留御駕籠御通行相済候ハ、見計早速相通し可申、 道筋ニ諸道具取散有之候分御通行ニ障り候分ハ取除させ可 場より立退候者等往来之儀者御通行之左右江片寄相通可申候、 一而も両岸通り無構相通し可申心得ニ 且御先江横切ニ参り掛り候者者御先馬迄ハ相通し、 御座候、 火消弁町人足火事 其外非常之儀者 其余者 川筋 申

御城外御出之節御先々二而私共扣所之義者、 別段御手当有之候

時宜二寄取計其段申上候様可仕候

樣兼而御館向江御達御座候樣仕度奉存候

右之通為相心得出役可為仕候, 依之此段奉伺候、 以 Ĺ

西八月

御小人目付

「百三拾三」

書付奉願 候

敷哉、 此度猶又改存寄書可差出旨御徒押衆より以書面御達有之、 惑仕候間 迄 聢与承及不申、 之節ニ而も是迄仕来之儀ニ付、 より勤年数無之者世話役二被仰付候而、 面之趣二而者御小人方筆順古役二可被申付段被仰聞候得共、 是迄格別之御差支与申儀も無御座、 .付候義者古役・新役ニ不拘、 右新役二而被 何 れニも先達而願書差上候通被 殊二御中間方・御小人方壱組壱人宛世話役被 仰付候例も有之、御差支ニも相成候儀者是 一同之気請ニ相障り候義者有之間 古来より組法ニ相定り致来候得 平生取締方者勿論 今更新法ニ 仰付被下置候様仕 一相改候而者迷 御成 古来 右書

> 度、 猶又以連印奉願 候、 以 Ŀ

文政八酉年十月

鈴木良右衛門

松井柳左衛門 吉田金太郎 喜多野巳之助 高倉啓之助

長田七右衛門殿 大橋次郎八殿 高橋友兵衛殿 飛澄才次郎殿

後弊可致旁旧来之方可然与此段重々及御相談候、 而者騒立可申趣二付、 者承服も仕居候得共、 御小人三組押平均筆頭之者江世話役申付候ハ、、 別紙之通御小人押申立候二付、 ハ廉治定不致義仕癖ニ相泥取計置候方穏ニ可有之与改革之儀者 筆可有之候 別紙之通御徒押江相達可申存候、 御小人押之方者是迄仕来之通ニ而無之候 内海巳之助殿 此度御徒押趣意之通、 於思召一盃御 御中間押之儀 御 尤起発 中間

十一月十 Ė

近藤鯉右衛門

金井伊太夫

古沢茂右衛門様

2 - 54

山崎又兵衛様

「御徒押より御小人押江之往答写」(朱書)

聞 申出候、 致各申合之上御中間方二者初発被申聞候通二替儀無之旨被申 内御小人組頭より達之儀ニ付、 話役中江相咄し猶惣躰之存寄も候ハ、可被申聞旨申達候処、 御中間方・御小人方打込ニ而泊り方古役江申渡候様可致趣、 頭·御小人頭江懸合候処、 用便丼気請等可然由ニ而不拘泊り方古役筆順ニ可申渡旨御中間 御小人押世話役之儀是迄一組壱人宛ニ候処、 八頭より世話役申渡之儀少々見合呉候様申来候間、 御小人方ニ者是迄之通ニ申渡呉候様致度段連印を以書面 御成之節何れも右様ニ而宜敷候段被相答、 依之猶又致評議左之通申渡候 何れ可然様可取計旨返答有之候ニ付、 御中間方・御小人方両日寄合被 此度振合を改メ御 然ル処其後御 任其意置候 世 浜 苏

渡候、 事故、 筆上可然仁江世話役可申渡候、 間方三人之内明キ候節ハ組ニ不拘泊方筆上可然仁江世話役可申 数者是迄之通御中間方・御小人方三人ツ、ニ相定、今度より御中 順二寄世話役二相成前文之通差支出来可申候、依之世話役定人 之通り其組限之筆順ニ而世話役申渡候而者勤年数無之候而も時之 より申渡候事共承候而、 元来世話役之儀者 且惣躰之気請ニも拘り不和之基たるへく存候、然ル処是汔 古役之者ニ無之候而者勤向事馴不申行届兼候義も可有之 御小人方も同断三人之内明キ候節者是又組ニ不拘泊り方 御成之節者勿論平生取締方等諸事頭江此 惣躰江も申談万端惣躰江も心附相勤候 尤双方共不勤之仁者相除キ可由 方

> 以 世話役双方三人ツ、ニ候間何れも存念有之間敷与存候、右之振 候、 勤取締方行届候様可被致候、 合可致候間世話役者勿論古役・新役とも惣躰別而入念出精被相 可被申聞候、 右様ニ候得者一 呉々も御用便幷気請和熟之所篤与勘弁被在之候 組壱人宛無之而已ニ而振分り、 猶惣躰評議之上存寄有無共書面 いつとても

酉十月

様存候、此段申渡候、

以上

御徒押

御小人方世話役中御中間方

御書面之趣承知仕候、 差上候通一組壱人宛被仰付被下置候様仕度奉存候、 猶 同評議致候処何れニも先達而願書 外に存寄

無御座候、 以上

十月廿一 Н

御小人押

覚

右山本鉄五郎跡

仮世話役

山崎伝右衛門御小人押

渡有之候様致度旨申聞候、 而者存寄無之旨申聞候得共御小人方ニ而者是迄之通一組限り申 候義も可有之候哉、 難儀之趣ニも相聞候、 不取極候二付先頃被仰付候、 右世話役之儀、 人古役之内江申渡候積り先頃御掛合およひ置候処、 同之存寄申聞候様談置候処、今以何とも不申出然ル処世話役 以来一組二不拘御中間方二而三人御小人方二而三 左候得者暫手間取二も相成可申候間 尤右一同答之品二寄候而者御目付衆江相 依之一役之儀得与致評議弁利可然方 高倉啓之助御番割·泊割等出来兼 御中間方二 右伝

右衛門義仮世話役今日申渡候、 依之此段及御達候、 以上

十二月八日

御徒押

御小人頭中

御徒押衆

及御掛合候 頭之者を御申渡有之候様致度存候、 組之内ニ而筆頭之者を御申渡御小人押も同断、 渡、 御中間押・御小人押世話役之儀前々仕来之通組々筆頭之者御申 尤世話役明キ候組ニ五ヶ年以上勤候者無之節者御中間押三 右二而御差支之儀者無之哉 三組之内ニ而筆

酉十一月

御小人頭

者二候而者差支申候、 世話役江打合相談之上御答致来候、 申 御書面世話役之儀拙者共壱人番二御座候間、 - 候内者同勢引方幷古例等御尋有之候節不分明之事も有之砌者 依之及御答候、 右之通有之候間勤年数無之 以上 御役成当分事馴不

十二月九日

御徒押

義二有之候、 以上相勤候 文化八辰年世話役被申渡候、 申 義安永四未年御中間押被 役被御申渡候而者御差支之旨御尤二存候、 御下ケ札之趣致承知候、 渡、 山田繁太郎儀享和三亥年御中間押被 ハ、勤向大概承腹も可致哉与之見込を以及御掛合候 従来一 組限世話役壱人ニ差定有之候を今更改革致 御中間·御小人押共勤年数無之者世話 仰付五ヶ年目ニ而同八亥年世話役被 右之通近格有之事ニ付本文五ヶ年 併当勤之内三橋平蔵 仰付六ヶ年目

> 候義、 世話役相勤候ものも有之候中ニ被取除候而者一 間、 強而御差支も無之候ハ、本文之趣御居置有之候様再及御 殊二此度順次之者五ヶ年も相勤候由ニ付的当右年数ニ而 般之気ニも相

掛 合候

十二月十六日

御小人頭

一年 (朱書) 拾四.

出候処後刻河内守殿御附札を以被仰渡候段、 ニ付加藤惣七名面ニ而、 文政八酉年十一月五日夜本郷丸山菊坂町賄役之屋敷地借より出火 左之伺書御扣共弐通同月七日御当番江差 带刀殿被申渡候二付

書面 [鰭付返上

御中間押込伺

本

目

帯

刀

覚

本郷丸山菊坂町大縄之内預ケ町屋敷

鈴木宇右衛門 御中間 組

加 藤 惣 七

類焼之者も御座候旨相届申候 右惣七預町屋敷地借町人共宅より一 依之右惣七義押込置候様可仕 昨五日夜九時過頃出火仕

哉奉伺候、 以上

酉十一月七日

御中間頭

出火遠慮可被申渡候

鈴木宇右衛門

御目付江

御中間

加 藤 惣 七

出火遠慮可被差免候

右河内守殿被仰渡候段帯刀殿立合、 内匠殿被申渡候二付鰭附返上

酉十一月

「百三拾五」 「百三拾五」

文政八酉年十二月

御茶之水物揚場京間拾四間

本郷元町持

田川御切広ケ之節被 右場所者古来より右町拝借揚場之所、 召上、 同所御普請出来後翌酉年九月中御 享保十三申年中大水後神

普請御奉行江奉願、 猶又拝借仕候由御座候

馬場下持揚場上之方 本郷竹町持

同所同中之方 同所金助町持

同所同下之方

右三ヶ所ニ而京間弐拾間、 前書同断、 享保十四酉年九月中拝借

.所同朋町持

仕候

右者古来より近辺御屋敷方・御扶持方揚場之由ニ御座候処、 日御入用無之ニ付前書町々引請物揚ニ相願用ひ来ル由、 平

変等有之御訴之節者、 河岸行事より町御奉行所江御訴申上候仕

依之異

来ニ御座候、委敷儀者度々之類焼ニ付帳面・書留等焼失仕候間

相分り不申候、 以上

西十二月

右者名主六右衛門より差出申候

ここに挿入図あ

文政九戌年正月御普請方改所留絵図之写(巻末参照)

御小人·黒鍬之者拝領屋敷本郷元町·竹町·金助町持場二被仰 本郷御茶之水通物揚場幷湯島馬場下物揚場、 前々之通御中間

渡候、 異変有之節者絵図面朱引之通相心得可申旨承知仕候、 \exists

上

文政九戌年六月廿五日

黒鍬之者頭 木村平次郎中山金三郎組

印

近藤鯉左衛門組物人人頭 金井伊太夫組 御小人賄役

大串百太郎 钔

金井伊太夫組 御小人組頭

南地官左衛門 高橋五郎三郎

印印

御中間組頭御中間頭

相原良右衛門 印

鈴木宇右衛門組

古沢茂右衛門組 佐

同断

藤定蔵

印

平山仁兵衛 印

小櫛七十郎殿上村吉兵衛殿

元町持揚場之儀此絵図之通申渡有之、此後極り之義宜相成、 右美濃紙一紙請書致し、 翌廿六日定蔵より掛り江遣ス 右

之趣名主被申渡向後之処極置之義申来ル

得共、 之趣、 本郷元町持御茶之水物揚場持之儀、 より三組御中間組頭江申渡有之、請書差出候事 心得可申旨、 候通本郷元町持揚場二被仰渡、 町屋敷持二仕度旨、 仕来ニ而、 揚場二相用、 より御中間大縄町屋敷持揚場之由申伝、 右之趣相違義無之義与存候間、 御徒目付坂部兵助より達有之候ニ付双方相糺候処、 委敷義者度々之類焼之砌、 御小人目付立合御徒目付上村吉兵衛·小櫛七十郎 異変等有之候節者町奉行所江町方之者より訴出候 絵図面相添申立置候処、 異変有之節者絵図面朱引之通相 当二月中御目付衆より御尋 書物等焼失相分り不申候 是迄仕来之通御中間大縄 是迄町々ニ而引請諸式 同六月廿五日申立 古来

変其外之儀共古来より是迄仕来之通相心得、 右之通此度被仰渡有之取極り候二付、 別紙絵図面朱引持揚場内異 諸事心得違之義無之

戌六月

様可被心得候

御書面之通相心得可申旨被仰渡奉畏候、 已上

文政九戌年六月

印印印印印

相原良右衛門殿 佐 藤 定 蔵殿

林 源右衛門 飛音衛門

印印印

源右衛門

差上申一札之事

_

私支配本郷元町持御茶之水物揚場之義、 為御請一札差上申候、 仰 不時異変等之節者町方二而引請取計諸事是迄仕来之通可仕旨被 等御調之上、御絵図面朱引之通河岸内三拾間之処持場与相心得、 渡、 則町人共江も右之趣申聞 仍而如件 同奉畏罷在候義御座候、 当二月中より古来之趣 此段

文政九戌年七月三日

本郷元町 名主 六右衛門 钔

佐 藤 定 蔵殿

翌日山崎江廻ス 右弐通之請書六月廿六日定蔵より差出候由 ニ而古沢より廻し来

文政九戌年十月

地誌御調書上

名主六右衛門支配 元町

本郷元町

御城子之方角ニ当り凡拾弐町余

町名起立之訳聢与相分り不申候得共、 町内之儀者御中間大縄拝

中間 河町 義ニ可有之趣申 郷 拝 家ニ不被 右場所往古之者豊島郡峡田領本郷村与申伝候、 知右引跡河岸者御武家地二相渡、 処明地ニ候哉、 江引退り、 組屋敷小石川・大塚辺江引払 n 中三河町駿河台辺ニ而拝領地八町 領屋敷ニ而 **;領地之内ニ而者外地面より右場所者別而御地** 完録十六未年二月中御用地 奉 神 元町与唱来候二付町屋 - 行能勢出雲守様御勤役中、 一般では、
のからに、
のからに、 茁 駿河町より引替拝領有之候処、 ፲፲ 川岸之辺一円御弓同 当時之場所江元坪之通替地被下置候由、 仰付已前神田川河岸通り江引地ニ相成候節、 -伝御座候 何れ之立跡ニ候哉相分り不申候、 御 入国之節 二被 心御組屋敷 二被 州 右跡江元和四午年七月中前書三 新規町家二御免有之候由 より 付 '四方程被下置 右之通度々沿革致し候儀ニ而 候節 召上河岸之方五拾間通り跡 御供仕候者、 其後元録八亥年九月中御 三候処、 直 こ右町名相用来候 渡有之候故、 翌九子年二月 且町名之義者町 其後年月不相 年月不知右御 其頃者当所よ 尤各替地之 慶長十巳年 本郷辺 然ル 本 中

草創人幷代地築立地無御 座 候

町内惣家数七百六拾九軒

内

拝領地主六拾人 但外五拾三人者他所 淫住 居罷在候、 且又外ニ

壱ヶ所組預り地御 座候

家主六拾九人 地借 七拾五 人 店借 五. 百 囥 拾五 人

明店弐拾軒

町 ?内横町幷長屋裏屋等之小名・里俗唱等無御 座

此

(自身番屋家根ニ火之見・半鐘有之候之処、

町

内限

n

仮

_ 隣町之名

東之方 同所付町 同所同朋町 目

昌清寺

安藤九郎左衛門様長 沢 大 蔵様

興安寺

西之方

久 永 主 等正寺

税様

長田三左衛門様 市良山三郎様 市良山三郎様 市成昭三郎様

南之方

北之方

土 井 幸 蔵様 本郷竹町 御持筒同心組 屋 敷

日比野七之丞様

内 東西江 北之方 南之方 同 京間百五拾間弐尺弐寸弐分 百拾弐間弐尺弐寸

町

北江 西之方 東之方 3舎間道巾者相除申候 同 七拾間四尺三寸

田

南

尤下町壱ヶ所者已前より町並 切土佐守様御勤役中御願申上、 町内自身番之義者私ニ南之方ヲ上町、北之方ヲ下町 自 二店借自身番御座候、 一鳥飼勝吉地面内ニ有之候処、 [身番屋弐ヶ所有之候内、 下町自身番屋者、 上町自身番屋、 間 間口九尺奧行三間半、 口三間半奧行弐間半、 弐ヶ所共建始年月相分不申 上町分壱町所者町並自身番ニ而、 三而 当時之場所往還江引相建申 勝手に付文化七午年十月中 当時も地主松岡長 此坪五坪弐合五勺 此坪八坪七合五勺 与相 五郎地 分置 小田 地 丽

二掛ケ置候儀ニ而組合之火之見ニ者無御座候

- 共、今以右之辺を河岸与里俗ニ相唱申候元町河岸与唱来候故、当地立跡武家地ニ而河岸ニ者隔り居候得之、其後跡江退キ去跡明地ニ相成、河岸見通しニ付南側町屋を、町内南之方町家之義、前ヶ条ニ申上候通已前御茶之水河岸ニ有
- 場所者三町目・四町目分ニ御座候
 尤右故当時も上町と唱候場所者壱町目・弐町目分、下町与唱候三町目・四町目与私ニ相唱候由之処、いつとなく元町与計相唱、一、町内之義、五六拾ヶ年程已前迄者四ヶ町相分、壱町目・弐町目・
- 神田川河岸之通内、 而深キ様子ニ相見え全井之跡ニ茂可有之奉存候 由ニ而、以前より付側ニも不相成、今ニ其所ハ水不絶渦巻居至 程曲り有之、右場所ヲ俗ニ大曲り与唱候、所之岸古井之跡有之 候趣申伝、 手なたれ下川岸ニ有之候処、 御 茶之水河岸与往古より唱来り候処、 · 御茶之水与相唱、 t城内江御茶之水二御取寄被為遊候義有之候ニ付、其砌右之辺 |川御堀割以前右川内之処ニ名水之井有之、いつ之頃ニ候哉 既二神田川之内当時火消屋敷与馬場与向之所川形余 万治之分神田川御堀割之節右井戸地之方土 火消御役屋敷脇より水道橋手前之辺迄を御 享保年中御堀広ケ之節川内 右起立聢与相分兼候得共神 <u>|</u>三相成
- 河岸内ニ有之候ニ付、右揚場坂与唱候儀も有之趣御座候一、揚場坂与申里俗近辺ニ者無御座候得共、町内持物揚場御茶之水
- 私相唱ひ候由ニ御座候処、当時之左様之里俗相唱不申候一、町内之儀、元録之頃神田台町又者御茶之水台町・御中間町抔与

町内南之方町屋向建部六右衛門様御屋敷者川岸通り迄打廻しニ 得共、全左二者無之鶯之義二御座候 掛ケ時鳥も他ニ声早ク啼候故、 流希致し申候、 (布) 右申上通り絶景之地故旧来之唱ひ相残り候、 間二付、 節右藪焼失致し、 森世俗ニ相唱候由、 年々鶯初音地ニと、 所南西受ニ而小川町辺見晴し風景も宜敷、 河岸之方一円崖ニ有之、 当時ニ而者別ニ鶯之初音早キ場所等申事者無之候得共、 勿論御府内ニ而者都而小石川辺より駿河台辺江 其後者只今以崖地草花・小笹等計ニ而至而浅 然ル処明和九辰年中丸山本妙寺より出火之 年ニ寄極月之内ニ而も啼候故自然与初音之 右崖迄御庭ニ相成居、 右初音之森者時鳥之事与も申候 右崖通一円藪茂り 只今以初音之森与 余程地高之場

町内公役銀之儀者壱ヶ年八拾壱人役相勤、賃銀之儀金弐拾弐両伝も御座候得共、全虚説ニ而左様之義者曽而無御座候但右屋敷江往古(御成等有之、初音之森与申名相付候趣ニ申

壱分ト銀拾壱匁弐分五厘納高を三月・八月・十一月三度ニ納来

、市定日無御座候

申候

但委敷義幷元録度之儀者相分り不申候有之候処、天明七未年四月中御差止ニ相成候節取潰し埋立申候廻し、百六拾間程も往来中程ニ埋小樋掛渡し有之、小枡四ツ所一、千川上水之儀者安永九子年中町内往還本郷壱町目境之方より打

追々相対替又者転役等ニ而当時名前左之通一、町内地主之儀者前書之通り不残御中間方大縄拝領地ニ候得共

地主方

_ 町道場無御座候

店借之修験左之通り

本郷元町半七地借 東叡山御支配 羽黒修験触頭

仙寿院配下

利益院

東山修験同所善吉店

聖護院宮 若王子配下 大宮院

東山修験同所伊兵衛店

鳳閣寺配下

右者委細ケ条之儀銘々より為差出申候 金剛院

町付二住居之穢多・非人無御 町奉行・御代官両支配之地

座候

,

_

反別無御 座候

, 寺社領無御座候

飛地無御座候

堤無御座候

右之通取調申上候、

已上

戌十月

名主 六右 衛 門

前書之趣相認メ御改御役人江差出候間写ヲ以御覧ニ入申候

御中間組頭 相原良左衛門 小野弥兵衛 安川七平

町内之地所者組預りニ而当時左之三人引請罷在候

目何之誰拝領地跡上ケ地ニ相成居候地所与相対替致し、

其節より

領地二候処、寛政十午年中勝手二付右地所差上、本郷春木町壱町

右名前之外組預り地壱ケ所有之、

以前者御小人目付平山平次郎拝

渡船場無御座候 川·堀等無御座候 御上り場無御座候 橋場所無御座候

_

坂・切通シ無御座候

`

火除地・馬場

的場無御座候

町内持物揚場之儀者、 御茶之水道り宇田川平七様幷建部六右衛(通)

門様御屋敷前川岸ニ而左之通り

右者町内地主方物借揚場二而、 河岸長三拾間 物揚場壱ケ所 享保十四酉年中九月拝借致し、 一、河岸行なたれ西之方拾壱間余

只今以町内物揚場二相用来申候、 尤委敷書留焼失致し無御座候

池・名水之井戸無御座候 神社・堂・

庵無御座候

古塚・古墓・古碑之類無御座候

御殿跡・御茶屋跡・城跡・陣屋跡・寺社・古上水跡・古戦場

馬場跡・ Ш 跡・堀跡無御座候

町役人以下惣而古キ家筋ニ而由緒 系図 (古カ) (古カ) 古器物等所

持之者無御座候

町内古より当時迄孝行・奇特・忠義之者等ニ而御褒美有之候者

「百三拾六

百三拾八番与百四十一番可見合事」

2 - 61

所御座候

検地無御座候

郷名其外言伝無御座候

御高札場無御座候

抱屋敷無御座候

本郷元町

「文政九戌年」三月右書面作右衛門殿被遣候旨ニ而、三浦伴次郎より(朱書) 差越否申聞候樣相達候間、 改名之有無丼武太夫御役出之訳翌廿一日

同 |人江佐藤・小林改名無之旨申遣ス

御目付衆

御勘定吟味役

御中間

佐藤錠之助

平井金次郎

右者先達而小普請より御奉公出被 仰付候由、 小林武太夫 改名等無之哉小

戍三月

問合候

普請中御役金取調候二付否早々被申聞候様存候、

依之此段及御

「文政九戌年三月」(朱書)

御目付衆

御勘定奉行 御勘定吟味役

御徒目付 小森宇源次

御中間 表火之番 小島半助

小林武太夫 平井勝右衛門

右五人者小普請中御役金納証文案紙五枚幷御支配無役之者御役 金案紙壱枚内訳書付共差進申候、 本紙西之内竪紙ニ認メ、此案

> 納旨是又御申渡有之候様存候、依之及御達候 郎宅江可差出旨御申渡、 時より四ツ時迄之内刻限ニ無遅滞、下谷御徒町中之町鈴木伝市 文相添上納金銀者後藤銀座常是包ニ致し、来ル廿八日朝六ツ半 尤改名等有之候者相改候名前二而可相

戍三月

山崎又兵衛承之

「文政九戌年」四月十日右壱通御月番小兵衛殿江差出定例承届之旨〔朱書〕(朱書)

覚

鈴木宇右衛門組 西丸御中間目付 三浦七蔵

右者病気二付但馬木之崎江湯治仕度旨相願申候間申上候、 以上

御中間頭

鈴木宇右衛門

林

戌四月

右庄之助義元化七午年七月四日上州草津江湯治仕同八月廿(シ) 庄之助 二 日

帰府仕候、其後文化八未年五月廿七日同所江湯治仕同七月十五 日帰府仕候、 都合弐度湯治願仕候

「百三拾八 百三十六与可見合、百四十一組合」(朱書)

上納申小普請金之事

高金壱分弐朱内 合金弐朱

外二壱分者去秋上納

右是者酉十月御奉公出被 仰付候ニ付前月九ヶ月分御役金之内

去秋上納、相残り方書面之通上納申処仍如件

文政九戌年三月廿八日

小林武太夫 印高拾五俵弐人扶持

部 伊織殿

服

鈴木伝十郎殿

「百三拾九」

殿江差出候処、 文政九戌年五月右書面御扣共弐通御部屋宗ニヲ以御当番五郎兵衛 即日摂津守殿御附札ヲ以御目見遠慮之格被仰渡候

御中間目付押込伺

御手洗五郎兵衛

鈴木宇右衛門組

山本猪三郎 御中間目付

廿二日御吟味之筋有之揚り屋江被差遣奉恐入候旨申聞候、 右猪三郎実方従弟御持頭青山主水組同心斎藤忠右衛門義、 去月 依之

猪三郎儀押込置可申哉奉伺候、已上

 \bigcirc

戌五月

御中間頭

鈴木宇右衛門

御 目見遠慮之格可被申渡候 \bigcirc

殿江差出候処、 文政九戌年五月右書面御扣共弐通御部屋宗二を以御当番五郎兵衛 即日摂津守殿左之通御書取を以被仰渡書面鰭付返

上

御中間目付押込伺

御手洗五郎兵衛

覚

鈴木宇右衛門組 御中間目付 山本猪三郎

可申処掛合方手間取及延引奉恐入候段申聞候、 月廿二日御吟味之筋有之揚り屋江被差遣候ニ付、 右猪三郎儀実方従弟御持頭青山主水組同心斎藤忠右衛門儀、 依之猪三郎義押 其段早速相届 去

込置可申哉奉伺候、 以上

戍五月

御中問頭 鈴木宇右衛門

届延引之段叱置可被申候事

「百四拾」

文政九戌年六月右御書付遠江守殿御渡帯刀殿被相達候二付、 佐右

衛門より差越承付いたし相廻ス

候処近来猥二相成、 申間敷候、来春可相改候間可存其旨候、 屋敷之内を町人等江貸置候儀前々より 屋敷地面之内者勿論長屋をも町人等江貸置 御制禁二候、 右之通安永八亥年相触 弥堅差置

間可致其趣候

候義相聞候、

弥右之趣相守心得違無之様可致候、

尤追而相改候

六月

右之趣可被相触候

(朱書) 百卅六、 百卅八組合物_

_ 一、同 一、同 、金壱分 、金壱分 除之分 、金壱分 、金壱分 三浦小左衛門 文政七申年十一月上納 高金壱分永四拾壱文六分内 高金壱分永百六拾六文六分内 高金壱分永弐百八文三分内 右之通人数六拾七人認有之候 銀拾欠 同断 銀拾弐匁五分 同 同 右是ハ当申閏八月無役入ニ付閏月を除十二月迄四ヶ月分 右三人者当申八月無役入ニ付閏月を除十二月迄五ヶ月分 右弐人当申七月無役入ニ付十二月迄閏月を除六ヶ月分 森本善吉 外二銀拾弐匁五分者当秋上納 外二銀拾匁者当秋上納 金太郎 内訳帳面之内 同 同 鈴木福次郎 鈴木加右衛門 同断 右同断 高同断壱人扶持 高拾五俵弐人扶持 高右同断同断 高拾五俵壱人扶持 高拾五俵壱人扶持 高拾五俵壱人扶持 古沢六三郎 西村鉄次郎 杉浦定之助 浦 牧田平左衛門 向井金市 部 源次郎 源 吾 一、同 一、 金弐朱 一、同 一、銀弐匁五分 、金壱分 、銀弐匁五分 、銀拾弐匁五分 、銀弐匁五分 文政五午年七月上納 高金壱分永弐百八文三分内 右之通人数七拾四人認メ有之候 高金壱分永四拾壱文六分内 高金壱分永四拾壱文六分内 居候二付前月七月分父御役金之内当秋上納相残分 右弐人父豊蔵、太源次当申八月隠居家督被下置、 右是者当午正月無役入ニ付十二月迄閏月を除御役金拾壱ヶ月分 右是者父伝八郎当申八月隠居家督被下置候所、 右是者当午四月御奉公出ニ付閏月を除前月三ヶ月分 二付前月七月分父無役中御役金之内当秋残り其分 鈴木嘉右衛門 外金壱分者当秋上納 外金壱分者当秋上納 鈴木直三郎 森本善吉 外金壱分者当秋上納 銀五拾五匁 内訳帳面之内 同 同 人数七拾八人 鈴木福次郎 洞 金太郎 合并唯四郎 高拾五俵壱人扶持 伝作御奉公出致 並木弥太夫 高根沢伝作 飯田金次郎 山本太源次

直二御奉公出

一、銀拾弐匁五分

指田新十郎 高拾五俵壱人扶持

右是者当午六月御奉公出ニ付閏月を除前月五ヶ月分

、銀弐匁五分

高拾五俵壱人扶持

小以金弐朱銀弐拾七匁五分 人数四人

合

金拾八両弐分弐朱 銀弐拾七匁五分

之先例之通端銀納御奉公出之者共内訳帳之内江御組込被下、惣付、矢張無役用役之者并無役世話役方ニ而納之義取扱候間、依銘々より上納之積り御達シ御座候、然ル処無役中御役金之儀ニ認メ御座候処、当戌年三月端銀之分御中間江御奉公出ニ相成、認リ州支配無役之者小普請金上納之節、端銀共内訳帳面之内江御目付支配無役之者小普請金上納之節、端銀共内訳帳面之内江

依之先例内訳帳認メ取、此段御内談申上候

金銀高ニ而支配月番御目付壱人調印手形を以相納申度奉存候

戍四月

御目付支配無役世話役

御勘定吟味役衆

可有之候間、無役中之端銀上納故御奉公出之者端銀ニ而も是迄共、勤仕ニ而者在勤等も致し殊ニ納方不案内之事故差支之義も印形致し相納来り候処、当春者御中間江御奉公出之者端銀銘々印形致し相納来り候処、当春者御中間江御奉公出之者端銀銘々成候者是迄何人ニ而も無役之者納証文之内江組込、拙者共之内成候者是迄何人ニ而も無役之者納証文之内江組込、拙者共之内成候者是迄何人。

二付、及御掛合候否御下ケ札ニ而御申聞有之候様致し度存候致し度段、御中間頭・御小人頭・御駕籠頭・無役世話役申聞候仕来之通、無役之者納証文之内江組込拙者共之内印形ニ而上納

四月

下ケ札

曽 根 草 内 主

匠膳

者納証文之内江御組入各様御印形ニ而上納有之候而も差支無御書面無役之内ニ而御奉公出之者月割御役金納之分、無役之

之候

六月

御勘定吟味役

「百四拾弐」

平野勘一郎・御使大沢善内罷越居候本恵次郎羽織袴ニ而召連出候処席ニ而左之通被申渡、尤為三郎義本恵次郎羽織袴ニ而召連出候処席ニ而左之通被申渡、尤為三郎義本恵次郎羽織袴ニ而召連出候処席ニ而左之通被申渡、尤為三郎義

小川佐左衛門御中間目付

相成候段、旁不束之至り三候、依之押込申付
「合不申、附人壱人も不罷出候ニ付河内守外供払方等不都合ニー合不申、附人壱人も不罷出候ニ付河内守外供払方等不都合ニーの人罷出処壱人も不出心得違、其上前日河内守家来相尋候節者大ル廿一日 御台様浜御庭江被為 入候節御供若年寄・附人両

「百四拾三」

文政九戌年五月右書面御扣共弐诵

御小人於遠国病死之儀申上候書付

長崎奉行手附書方出役金井伊太夫組御小人

斧生源内

右源内儀去酉年七月長崎表江罷越候処、当月朔日於彼地病死仕

依之申上候、以上

候旨申越候段、昨十六日相届申候、

五月十七日

金井伊太夫

御小人跡式伺 御扣

月番

新見伊賀守小田切土佐守

金井伊太夫組

御切米

一、弐拾三俵

御譜代之者

斧 生 源 内

近藤鯉左衛門組

仮養子奉願候置候者 惣内次男

皮弐十弐歳 金 指 又 市

表病死仕候二付、 右源内儀長崎奉行手附書方出役相勤罷在候処、当月朔日於長崎 兼而奉願置候通跡式養子又市江被下置候樣相

願申候問奉伺候、 已上

御小人頭

「百四拾四」

右御扣共三通由緒書壱通

相伺候様土佐守殿御徒目付組頭小野伝左衛門江御沙汰有之、御徒 山八之助組御使彦坂金七去月廿九日左之通不調法有之、押込之儀 文政九戌年八月廿五日土佐守殿宗二を以、酉二月二日自分当番杉 合有之、先格も有之義ニ付伝左衛門江相答置、 目付黒川健助右状取次候由同人も相伺候間、 当番所取扱可致旨掛 左之通同六日被仰

渡候

覚

彦 坂 金 七

金森甚四郎

返事与相心得当番所江差出候段不調法至極恐入奉存候、依之金 平次与申者江為持差出候処、宿所相分り不申候ニ付持帰り候を 郎より御同所御小納戸本多半兵衛宅江出候封状黒鍬之者小池宇 右者去月廿九日 若君様御附御小納戸遠山七左衛門·宝賀源七

七押込之義奉伺候、已上

金森甚四

郎

不及押込、以後入念様可被申渡候

江呼寄申渡候 甚四郎殿被申渡候旨小野伝左衛門より達有之、 右之通摂津守殿江被相伺候処御附札ヲ以被仰渡候段伊賀守殿立合 即日金七義自分宅

「百四拾五」

江相廻ス 文政九戌年十二月右御書取当番所伊兵衛より差越五役承付御徒押

上綱介殿御渡

御目付方支配之者共屋敷相対替等相願候節者、

相見候、以来高書入差出候様可被心得候事

十二月

「百四拾六」

文政九戌年十二月右書面壱通尤此折御届弐通物二而差出候処、 赦御届ケ限り御部屋ニ而認メ直しニ相成候ニ付壱通物差出、 且栄 御

之丞義羽織袴二而罷出候事、 勿論外ニ差添も無之候

鈴木宇右衛門組御中間

組役之者 加藤栄之丞

間弥五兵衛倅同組元御中間和田銀平義先年遠島被 右者昨十六日榊原主計頭御役宅江差出候処、太田佐兵衛組御中 仰付候処

文化十三子年 御転任 御兼任御祝義之御赦被 仰付候、 然

江申渡旨主計頭申渡候段栄之丞相届申候、依之申上候、已上

ル処右銀平儀於島致死失身寄無之ニ付、

出羽守殿依御差図其方

十二月十七日

御中問頭 鈴木宇右衛門

「百四拾七」

文政十亥年肥後守殿御渡十郎左衛門殿御達

御法事、来ル七日より同十三日迄

右之通候事

神田橋御屋敷 御小人頭江

御出棺

一、龕前堂江

被為 入候由

右之通御注進有之候間人数取調早々可申聞事

三月

右御達書掛り御使増井三次郎を以被遣候ニ付承付相返ス

最樹院殿御出棺之節御注進人数

神田橋御屋敷

御出棺

龕前堂江 被為 入候由

右之通ニ御座候、 三月

以上

御中間

御先

御小人 弐 人

御中間 几 人

御小人頭

2 - 67

最樹院様

三月五日 巳下刻 御出棺 未下刻 御葬送

者之高附無之茂

西御御小人方 丸

西丸江丸

小田切土佐守金森甚四郎

拾六人

西御西御 丸本丸本 江丸 江丸

右書面壱通掛り御小人目付金指惣内江遣シ差出ス

(朱書) 「百四拾八」

文政十亥年三月右書面当番所高倉助五郎より相達、 衛門を以返却、右之趣弥市左衛門を以御長屋御門番江申渡ス、尤 両役承付七左

新土戸番江も達置候旨申聞候

御小人頭江

御納 御門番人江可申渡候事 幷其者名面承糺し、 者小用致し候ハ、厳敷相制シ、夫ニ而も取用ひ不申候ハ、主人 間、 此段新規小用所出来右石蓋之儀者囲附置候間、 戸口前腰折脇下水石蓋江、 御徒目付当番所江申聞候樣御納戸口御長屋 供待之者致小用不作法之事二候 以来供待之

三月

羽 太左

京

「百四拾九」

文政十亥年三月十三日右之趣廻状ニ廻し来

御目付支配無役指田新十郎儀、 宗二を以願書御下ケ被成候ニ付、 世話役より差出候処、 最初より遠国者難相成旨、 病気二付越中立山江湯治願無役 柳田勝太郎江相達シ申候 内匠殿御部

右湯治願之儀、 宜旨ニ付、 之候処、 最初近国江罷越候上二候得者、 五役ニ而も相心得居候様内匠殿御部屋宗仁を以被仰 御月番内匠殿より御右筆田中竜之助江御問合有 引続遠国江罷越候而も

「百五拾」

文政十亥年三月晦日右御達書御部屋春貞を以被遣候に付即刻月番 孫次郎申渡ス、 四月朔日古沢江相頼御部や閑悦ヲ以返

御 目付衆

館野忠四郎 村垣淡路守 神原主計頭

付旨、岩之助江可申渡旨御中間頭江御申渡有之候様存候、 来之通預り地二致し、右返済残金七両壱分余丼貸店修復之義 俱二相願候段家守孫七幷町役人共申立候間、 貸長屋及大破明店ニ而上り高無之趣を以、去戌七月分より相滞 五ヶ年賦元利成崩之積を以貸付おき、月々元利返済仕来候処 此段及御掛合候 人共江証文申付候間、 皆済迄月々上り高之内、 願出候間、 面地代・店賃上り高引当、去ル未年十二月中町会所金拾六両 鈴木宇右衛門組御中間大浜岩之助拝領町屋敷、 元利納方出来兼候二付、 是又取調修復差加遣し候ニ付、 以来納方等閑之義無之樣家守江急度可申 右地面町会所江預ケ地ニ仕度旨、 町入用仕払残金不残同所取立候積町役 残金・修復金共元利 取調之上町会所什 本郷菊坂台町地 地主 依之

亥三月

「百五拾壱」

文政十亥年四月十一日右御書付を以遠江守殿被仰渡候段、 主膳殿立合帯刀殿被申渡候 御目付

御目付江

池谷錠之助

右評定所書役当分出役可被申渡候、 尤御勘定奉行江可被談候

亥四月

「百五拾弐」

文政十亥年四月廿八日右九郎右衛門殿被仰渡当番所小野伝左衛門

より相達ス

右之者共只今小田切土佐守宅江可被差出候、 病気候ハ、名代可

差出候

四月廿八日

遠江守殿

御目付江

山島田忠儀登

坪山 忠儀 登付

八蔵平

右者此度 大目付 · 御目付江可申立候之処無其儀不束之事候 御大礼之節津軽越中守轅相用候二付、 見請候ハ、相 依之押

込被仰渡候

御小人目付

加藤此八 伊内源太郎 作 作

共出役之者より不申立候とも、 心附処無其儀不調法之事ニ候、 依之 平日供連之儀取扱候上者相定可 御目通差扣格申付候

右者此度

御大礼之節津軽越中守轅相用候節、

出役者不致候得

右之通可被申渡候

文政十亥年四月二十八日右之段、土佐守殿於御宅ニ甚四郎殿立合

土佐守殿杉山八之助江被仰渡候事

外二右御徒目付五人之分同日廻状

二申来

押込

御目通差扣格

出役 調 御徒目付 \equiv

人

弐

人

断

(朱書)

文政十亥年六月右之通相認メ伊賀守殿・十郎左衛門殿江入御覧候

上、御勘定長屋一郎江遣ス

雨天二候得者実々濡候而御羽織損候二付、 之故御手当相願不申候、 無之、縦令雨降候而も参詣済出役引払後又ハ出役以前之儀も有 当三月廿四日公家衆両山参詣之節、 之義先例御問合之趣致承知候、是迄公家衆参詣之砌雨天之儀も 組之者共出役手傘相用候義難相成節 雨天ニ付出役之者濡御手当 其節二御手当請取来申

御成御用·外場所御用之差別者無之、 先例有無拘り不申候、 候、既二御三卿方御出等節出役之者共濡御手当請取候義も有之、 御役羽織着用ニ而勤先ニおゐて濡候者 何れ之場所ニ而も濡候姿

弐条相認メ此段及御答候

同様之義ニ御座候間、

此度御手当相願候義二御座候、

依之類

文政三辰年七月十八日

田安殿・兵部卿殿・右衛門督殿浜御庭江御出之節、 雨天ニ付出

役之者濡御手当請取申候

文政七申年十二月廿三日

、式部卿殿亀有筋江御出之節、 雨天二而延引相成候得共出役之者

濡御手当請取申候

同九戌年九月十一日

式部卿殿中野筋江御出之節、 雨天ニ而延引ニ相成候得共出役之

者濡御手当請取申候

右之通御人所々出役致し候節ニ雨天ニ候得者、 濡御手当銀請取来

申候、已上

亥六月

御小人頭

「百五拾四」

文政十亥年十月

鈴木宇右衛門殿

拝領大縄町屋敷

御代官

中川忠五郎

大岡源右衛門手附

本郷菊坂町

平山茂右衛門

渡候二付、 廿五日存命二候得者遠島被 右茂右衛門儀不届之筋有之於大坂表上り屋ニ致死去、当亥正月 右地面上り地に相成当月朔日町奉行所江引渡に相成 仰付候旨大坂町奉行内藤隼人正申

書面之通相違無御座候哉、 候由、 然ル処御中間大縄町屋敷ニ候間取戻願差出可申奉存候 此段及御掛合申候、 以上

亥十月

鈴木宇右衛門

下ケ札 \triangle 義、 御書面之通御代官大岡源右衛門手附平山 御仕置被 仰付候に付右地面上り地に相成 茂右衛門 当

月朔日町奉行所江引渡相成候、 亥十月 此段及御挨拶候 ·川忠五郎

門屋敷会所金者返納無之候

文政十亥年十一月右書面御扣共三通例書壱通添、

此度平山茂右衛

奉願候書付御中間大縄屋敷取戻之義

本郷丸山菊坂町 拝領大縄町屋敷

御代官

大岡源右衛門元手附 平山茂右衛門

右茂右衛門義当亥正月於大坂表御仕置被 右者御中間大縄屋敷ニ御座候間先格之通御中間組 仰付町屋敷上ケ地ニ

御返シ被下候様奉願候 以上

亥十一月

御中間頭 古沢茂右衛門

2 - 70

本 目 帯 刀

月番

覚

相成申候、

請取申候 文化二丑年十一月廿四日達有之、翌廿五日小田切土佐守より地所

例書

江守覚太夫 元御中間

右覚太夫儀江戸十里四方追放被 御中間大縄町屋敷二付文化二丑年六月取戻之儀申上候処、 仰付町屋敷上り地ニ相成申候

同年七月願之通元組江御返シ被下候旨兵部少輔殿被仰渡候

守殿立合十郎左衛門殿被申渡候ニ付書面ヒレ付返上 文政十亥年十二月廿九日右増山河内守殿被仰渡候段、 御目付豊後

右茂右衛門上り屋敷御中間大縄屋敷ニ付、 取戻願之通御中間

江御返被下候旨

十二月

十五日四ツ時受取人幷立合之者差出 文政十亥年十一月十四日町奉行榊原主計頭より申来候に付、 翌

御目付江

榊原主計頭

九拾五坪余 本郷丸山菊坂町 東朝

平山茂右衛門大岡源右衛門元手附御代官

渡可申候、 右之者上り地面御中間大縄町屋敷ニ付、 依之明十五 日四ツ時晴雨共右場所江請取人幷立合之 元 紀江返被下候間御引

者御差出可被成候

右書面豊後守殿御下ケニ付、 承付御部屋亥久を以返却

本郷菊坂町平山茂右衛門拝領町屋敷先達而上り候処、 右者御中

数御改被成御渡、 右絵図面之通無相違請取申候、 仍如件

.'大縄屋敷之内ニ付元組江被返下候間今日各方御出'

間数・

坪

鈴木宇右衛門卵

佐藤定 組

文政十亥年十一月十五日 請取人 蔵

同

立合

加 藤

惣

七

樽屋三右衛門殿 仁杉五郎八郎殿 島 半 助殿

町年寄衆中

立合罷越候者名面左之通

榊原主計頭組与力

山田三助 筒井伊賀守組与力

同組年寄同心 植木栄左衛門 仁杉五郎八郎

平館喜惣次 今 井 平 八

町年寄手代

地割手代 増田壮兵衛

干 * 4 洒 文政十亥年十一月十六日右壱通御当番帯刀殿江亥久を以出ス 本郷菊坂町 覚 表田舎間四間壱尺 拝領町屋舗 裏行同断 此坪九拾五坪余 平山茂右衛門 大岡源右衛門元手附 裏行同弐拾三間三尺 拝領町屋 上り屋敷 裏帽表同断 % * 寺 「百五拾五」 、水道橋

本郷弐町目 右之通相心得候事 十一月 御先見候由

石河甲斐守屋敷前

御先見候由

同断断

御先見候由

同 同断同断

平川口御門

御先見候由

御小人方

右御達掛り大橋元六より差越承付返却

鈴木九郎右衛門

候二付請取候旨組役之者申聞候、依之申上候、以上 力島半助・筒井伊賀守組与力仁杉五郎八郎両人罷越、 右上り屋敷御中間組江御返被下候間、昨十五日榊原主計頭組与 御中間頭 鈴木宇右衛門 地面引渡

亥十一月十六日

御代官 平山茂右衛門元手附

御広敷江

御住居江被為

入候由

附人

御広敷被遊

御出輿候由

御小人 御本丸江

溶姫君様御引移之節御注進幷附人

御小人頭江

文政十亥年十一月七日摂津守殿御渡九郎右衛門殿御達

溶姫君様

十一月十一日 御道具初日 同月廿七日 御引移

右之通御日限被 仰出候間、 得其意向々江可被達候

右当番所より差越五役承付返却

文政十亥年十一月十二日右御達書当番所より差越候ニ付承付御徒

押江相廻ス

溶姫君様御引移御当日 而茂有合候熨斗目相用、 面々無地熨斗目常々半袴 当番之御番衆幷 殿中服紗小袖麻上下着用、 殿中詰合之諸役共無地ニ而も腰明ニ 御目見以下御祝不拘 翌日出仕之

もの服紗小袖麻上下着用之積り伺相済候事

十一月

鈴木九郎右衛門

「百五拾六」

文政十亥年十二月十六日

御小人頭

来ル廿七日松・菊引移之節御広敷御門より汐見坂御門・平川口 御門通被相越候、 右引移之節道筋 御城内御門念入人留下座等

右之趣伺相済候間、御広敷御門·奥表仕切御門·御太鞁櫓下御門 ニ不及、往来之者不作法等無之様心附、着服之儀者平服之積り

二丸御広敷御門右番人江可申渡候事

十二月十六日

新見伊賀守

「百五拾七」

同年十二月十二日程村半切紙ニ認、印形無之、上包美濃紙折懸ケ

一而上之字認、 御中間頭与下之方左之端江書差出ス

覚

山崎又兵衛組

内山新右衛門弟 内山吉十郎 亥三十三歳

御暇申渡、兄新右衛門方二罷在候処、常々身持不宜候間、親類 右吉十郎儀元御中間相勤候処、文政六未年五月病気ニ付願之通

成、末々難見届奉存候ニ付此度右吉十郎追出し、新右衛門幷親 共打寄度々異見仕候得共、一向相用不申近頃者別而不行跡に相

類共一同久離御帳二記置申度旨相願申候間差出申候、以上

文政十亥年十二月

山崎又兵衛御中間頭

筒 伊賀守様

「百五拾八」

同年十二月九日九郎右衛門殿江差出、即刻摂津守殿江進達

御小人目付

安達次兵衛

為迎、金御紋革覆掛小長持二差添罷越候途中、 右者昨八日朝御腰物方御用二付、 御鞘塗師岡清九郎方江御道具 下谷黒田豊前

込之義奉伺候、以上旨附添罷在候而、不行届段不調法至極奉恐入候、依之次兵衛押旨附添罷在候而、不行届段不調法至極奉恐入候、依之次兵衛押人黒鍬之者ニ突当り候ニ付小長持取落候処、内之御品箱相損候屋敷前ニ而御側衆中務少輔殿ニ行合申候処、右供之内押足軽持

十二月九日

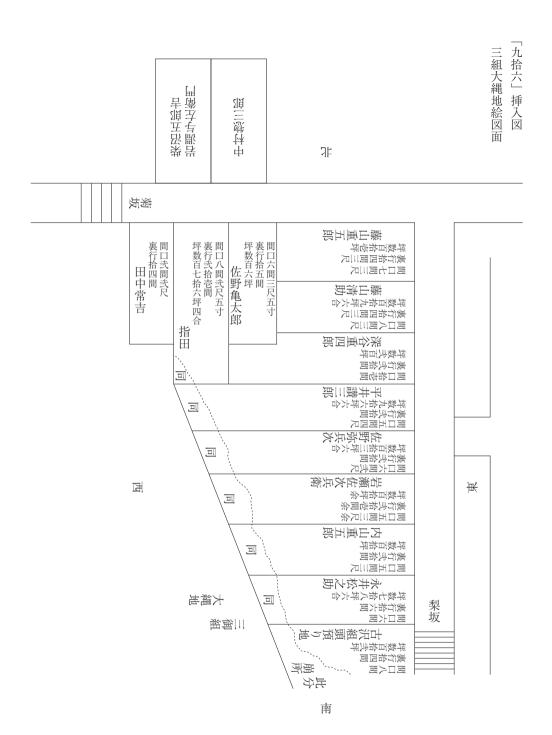
小野伝左衛門

安達次兵衛御小人目付

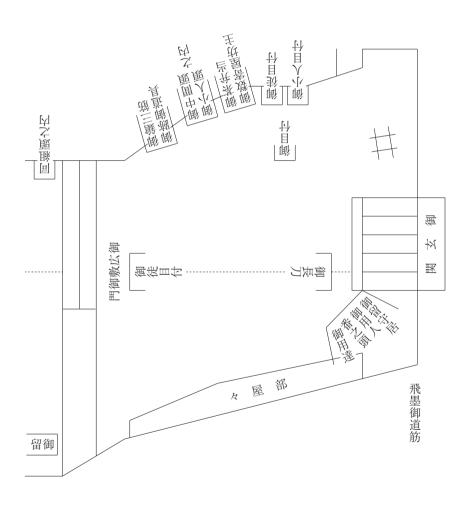
以上 為迎、 候旨次兵衛相届、 九郎申聞候、 尤御品に損等無之哉之旨承り候処、 垣庄司江右之次第申断、御長持者御職人方江無滞差添相渡申候、 人数駆集候二付格別相制候得共、黒鍬之者打擲仕候二付供頭石 御箱有之迚持人黒鍬之者突倒シ、 右御道具ニ突当り申候、尤其以前御道具与声掛候得者此方ニも 而御側衆中務少輔殿ニ行合、惣御供廻り脇ニ押足軽壱人相越、 右者昨八日朝御腰物方御役所より御鞘塗師岡清九郎方江御道具 金御紋革覆掛小長持差添罷越、下谷黒田豊前守屋敷前二 則御道具受取罷帰、 前書之始末申立候ニ付別紙を以此段申上候 其上長柄持其外手廻り追々多 御腰物方武島三左衛門江相渡 御上箱二御損有之候由岡清

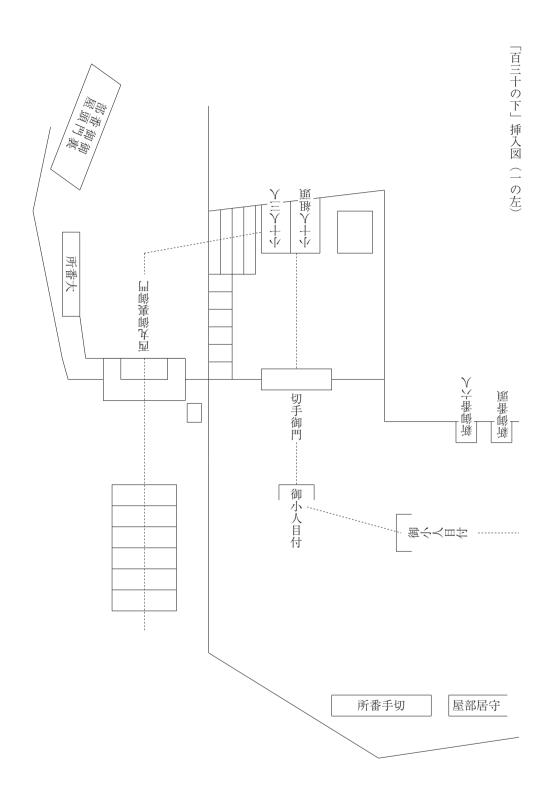
十二月

小野伝左衛門御徒目付組頭



西丸御広敷御供建場絵図 若君様 御本丸江被為 入候節





西丸御広敷御供開場絵図 (二の右) 環御之節

